



教職大学院 Newsletter

No. 161

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.8.10(公開版)

学び合うコミュニティを培う校内研修

福井県小浜市立小浜第二中学校 校長 加福 秀樹

『最近、カンファレンスを学校に取り入れられないかと思うようになった。このサイクルを現場の先生方同士の中で実現できれば、一人一人の先生方の思考が整理され、より質の高い仕事につながっていくのではないと思う。～中略～ 今までに味わったことのない効果が期待できるような気がしている。～中略～ 今こそ校内に擬似的な機会を創出し、研修の在り方そのものを見直す必要があると考えようになった。そしてこの学び方は、今まさに子どもに求められる学び方でもあるからだ。教師自身が体感し、この良さや効果を味わうことが、授業改善の本質へ迫る近道であるような気もしている。』

これは、平成 29 年度末に作成した長期実践報告の「おわりに」の結びの一節である。私は、福井大学での学び、育ちに衝撃を受け、校長になったらカンファレンスをぜひ取り入れたいと考えていた。自分の気づきからの広がり、深まり、成長から、今必要な研修スタイルは「これだ」と強く思ったのを今も覚えている。

学年、学級、教科、年齢、キャリアの壁を越えて経験や実践を語り合うことで、教育観を刺激し、指導力向上や人材育成が図れることはもちろん、カンファレンスには学校現場に必要な多くの副産物が期待できる。同僚性や関係性、仲間意識や連帯感、職場の雰囲気や風通し、ストレス発散やカウンセリング効果など一石何鳥もの可能性がある。働き方改革が求められる昨今、私にとってチーム力の醸成には欠かせない有効な手法であった。

令和 2 年度に校長を拝命してすぐに研究主任に方針を示し、プロジェクトチームからカンファレンスが提案され、校内の手続きを経て通年で実施の運びとなった。実践は研究主任が中心となり、私はサポート役に徹した。

カンファレンスには管理職も参加し、養護教諭も ALT も再任用も含めて全員で行った。そして、終了後は思考整理を兼ねて必ず振り返りを書き、残していくことにした。

各回のテーマについては、本校教員には集団を育てる経営力に一番の課題があると感じていたため、「学級づくり」にウエイトを置いた。担任が前期、中期、後期と通年で学級経営案を示して進捗を語ることや、行事（合唱コンクール）を学級経営にどう生かすのかなど経営視点を養おうと考えた。他の回では授業づくりや生徒指導、部活動についても時期に合わせて語り合う機会を設けた。

内容

巻頭言	(1)
スタッフ自己紹介	(4)
院生自己紹介	(7)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(23)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(25)
月間合同カンファレンス報告	(29)
修了生だより	(35)
2022 年度拠点校、協働実践校、連携校一覧	(39)

最初の頃は、時間を短く設定して行っただが、本校教員はどの立場も不慣れなため、語ることができず、井戸端会議風の悩み相談会になっていた。質の向上を図るために、毎回終了後に研究主任と振り返りを行い、本校教員の様子や反応、振り返りシートを確認し、方法や方向性について修正を加えていった。回を追うごとに、おのずと研究主任の本校教員への言葉がけも高度になっていった。

ある程度経験を積んだ中間期に、再度、カンファレンスについて研修を深めるよう研究主任に促し、まずは研究主任がミニ講義を行った。さらに後期の始めには福井大学の先生4名が院生指導に來校されていたため、カンファレンスに外部の風を入れることを提案した。大学の先生からカンファレンスについて直接レクチャーを受け、実際にファシリテーターとしてグループに入ってもらい、本校教員に助言・指導をいただいた。以後、毎回のカンファレンスに参加していただけたことで、後期は本校教員がじっくり時間をかけて対話を深められるようになり、カンファレンスの中での気づきが増え、より実践の捉え直しができるようになった。福井大学の先生方には昨年度まで2年間、外部の異質な視点から継続的に刺激を与えていただいた。毎回のカンファレンス後には本校教員に感想やご指導を、そして研修後には私と研究主任に指導・助言をいただいた。特に研修後の時間では、経営的視点で多くの気づきを得ることができ、テーマの具体～抽象および時間軸のピント調整、メンバー構成や時間の取り方など、質の向上や次の形を生み出していくことにつながっていった。ちなみに今年度の実施日は6時間目をカットして時間を捻出し、60分枠で2本行っている。メンバーはテーマによって変えたり同じだったり工夫して取り組んでいる。



校内研修にカンファレンスを取り入れてから、学校に変化が現れてきた。まずは、学校評価の数値である。本校教員がはっきりと「できた」と回答した割合が、過去3年間は質問項目を変えずに3年かけて32.4%→48%であったが、令和2年度は質問項目を

変えたにもかかわらず1年で54.2%であった。この勢いを受け、令和3年度は質問項目をさらに高度な内容にしたが初年度から通年で40%以上を記録した。

本校教員の振り返りからも個々の変容や成長が伺えた。ある回で、担任Aがファシリテーターである福井大学の先生の揺さぶりに葛藤し、再構成して決意していく様子を記すなかで、「この研修で、自分が合唱を通して何を学ばせたいと思っているのか、どんな力をつけたいと思っているのかを改めて考え直すことが出来た」と記している。揺さぶりに自問自答しながら大事にしたいことを捉え直し、実践の意味を一段深めて成長している姿が伺えた。その時、同じグループにいた担任Bは担任Aの話をヒントとして、自分の考えをいくつも再構成し、整理している様子を記している。そして、再構成の大事な部分で、ファシリテーターの同じ言葉を担任Bの場合はヒントとして、担任Aとは違う形で取り入れようとしていた。このようにグループ内で化学反応が起きていた。それぞれに自分なりの捉え直しが行われ、毎回の成果はさまざまに個別最適化形で育ちが見られた。この担任Bは年度末の振り返りで「これまで学級経営案は立てて終わりだったことが多く、何度も振り返りができて意味のあるものになった」と記している。

前述の担任Aは研究授業でもカンファレンスの効果が見られた。対話の良さを実感した担任Aが、対話的な学びをデザインするようになっていた。そして、「授業づくり」をテーマとしたカンファレンスで、教科での実践が再構成され、新たな授業デザインを生み出していた。生徒の対話のどこに手立てを打てばよいのかをよく理解して教科の専門性の中で学びをデザインしていた。私が一番嬉しかったのは、この担任Aがカンファレンスで、担任Cの学級づくりの実践を聴き、研究授業にあえて担任Cのクラスを選んでしたことである。担任Aの成長はもちろん、担任Cの意図を汲んだ授業づくりにチーム力を感じた瞬間であった。

昨年度末に、研究主任が振り返りをもとにカンファレンスを総括している。その考察には「担任に経営目線を持たせた」「語ることで自己解決している」「全

員にとっての学びになっている」「カンファレンスの良さを感じ始めた」とまとめられていた。一方で、課題には「マンネリ化」「担任の負担が大きい」「ファシリテーターの力不足」を挙げていた。先ほどの担任A・Bの振り返りの通り、ファシリテーターの力量がカンファレンスを左右することに気づいていた。本校教員の満足度を高めるために、再構成のための話りの取り回しを、少しでも上手く出来るようにしたいと考えてくれていた。

そして、今年度の改善点を示していた。まず「経験者にアンケートを実施」して、グループ編成や課題について、意見を取り入れながら協働で進化させようとしていた。さらに、「初心者研修」と「ファシリテーター研修」を企画していた。初心者には初回から意味のあるものにしてもらおうと、ファシリテーターには取り回し方の心得や手法を事前にレクチャーしている。さらに、後者には毎回終了後にスキルアップを図るための反省会を予定している。研究主任が成長し、自力自走しはじめた。今年度は、福井大学の先生の手を離れ、学校として一人立ちしていける気がしている。

カンファレンスを始めてから職員室が明るくなり、活気が出たとの声が聞こえてくる。職員間にコミュニティの輪が広がり、垣根を越えて通じ合うことで、分かり合える同僚性や関係性が生まれ、お互いの意

図を汲み取って動ける関係になってきた。これらがチーム力として機能し始めている。ここ数年、来校者や関係者、保護者の方々から学校の様子や生徒や教師の姿に有り難いお褒めの声をいただくことが多くなった。また、令和2年度以降は全国レベルの学校賞を2つ受賞している。これらは決して偶然ではなく、カンファレンス効果がチーム力として教育活動全体に波及した成果ではないかと思っている。



福井大学教職大学院での学びと福井大学の先生方のサポートをいただいて、今日の実践および成果に至っている。お陰様で、本校教員は省察を繰り返しながら自力で負荷なく自然な形で一度に多くのことを個別最適に磨くことが出来ている。その心地よさの中で主体性が呼び起こされて自分探しが始まり、教師自身の探究的な学びとなっている。そして、校内研修で培われた関係性が各所で次のコミュニティを創り出し、チーム力を生み出している。個々の経験や学びが他者との対話によって磨かれ生かされていく省察的な学びの良さを体感させ、専門職らしく学習する組織へと導いて下さった福井大学の先生方に心から感謝している。そして何よりも有り難く嬉しいことは、そのお陰で教師が成長し、生徒に幸せがもたらされていることである。



スタッフ自己紹介

PASSIONを忘れずに

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 浦井 寿尚



新採用は敦賀市の中学校でした。全国的に校内暴力の嵐が吹き荒れた時期で、赴任した中学校も前年に新聞等で学校の荒れが記事に

なったほどの荒れた中学校でした。その年、校長先生、教頭先生、教務主任の先生をはじめ、職員の半分以上が人事異動で入れ替わるという状況でした。

新しく着任された校長先生は、ことあるごとに自分たち若手教員に「教育は PASSION だ。技術はあとからついてくる。」と励まし、いろんなことに挑戦させてくれました。

1つは「全校フォークダンス」。毎日、給食当番以外のすべての生徒を体育館に集め、学年を解いてフォークダンスをしました。もともとの発想は、給食の準備時間を静かに待てない生徒たちをなんとかしたいということでした。ベテランの先生方の中には、そんなことに何の意味があるのかと反対する方もおりましたが、とにかく PASSION で押し切りました。

もうひげのはえはじめたような中3男子生徒が、小さな中1女子生徒の手を恥ずかしそうに握りフォークダンスをする姿は本当に微笑ましかったです。生徒たちの笑顔が確実に増えました。

もうひとつは、生徒会の考えで始めた「無人購買」。誰もいない棚に置かれたノートなどの文房具を、生徒は自分で箱にお金を入れ、硬貨一枚一枚を紙で包んだおつりをもっていく。放課後、委員会の生徒が毎日おつりの計算をし、1円でも違っていればその都

度全校集会。みんなはどうあるべきかを何度も考えました。

おつりが合わない日が続くこともありましたが、先生方の中には、学校がどろぼうをつくるのかと反対する人もいました。ただ、そのたびに全校で集まり、話し合いを続けることで、生徒たちはおつりが間違えることなく何日も続くことを誇りに思うようになっていきました。

他にもいろいろなことに挑戦させていただきましたが、その時の校長は、きっとこれらの提案に、はじめはぴんときてはいなかったと思います。でも、自分がぴんとこないことだからこそ、大事にしてくれました。たぶん学校文化の創造とはそういうもので、そういう校長の器量の大きさが学校の文化を創ってくれたんだと思います。

福井大学の附属小学校で学級担任をしていた時は月1回出していた学年通信とは別に、学級通信を書いていました。目標は1年で100号を超えること。1年間の授業日が約200日だから2日に1回は出すことになります。自分はもともと見た目もパツとしないし、話上手でもないから、学級通信の名前をかめばかむほど味の出る担任という意味を込めて「あたりめ」としました。

目標に向かって書き始めると、すぐに書くことに困るようになりました。書くネタがすぐに枯渇してしまうのです。子どもたちが帰った放課後、原稿用紙の前に座って「さて、今日は何を書こうかな」と思っても、なにも出てこなくなるのでした。そこで、文書に向かう構えを変えることにしました。「なにかあつ

たかなあ」ではなくて、いつも「何か書くことはないかなあ」という思いで、子どもたちの活動を見つめるようにしました。この「いつも書くために探している」という姿勢は、子どもたちを見取ることに大変役立ちました。

今後、ますます若手教員が増えていきます。ベテランがいろいろなノウハウを伝授していくことはもちろん大切ですが、それだけですべては解決しません。子どもたちだけの問題ではなく、教員自身も自ら学び、自ら考えることが大切になります。そのような教員を育てることを目標に PASSION を持ち続けたいと思います。



福井大学連合教職大学院 非常勤講師 山本 晃市

今年4月から教職大学院に勤務することになりました山本です。38年前に福井大学教育学部を卒業後、この3月末をもって教員生活38年間にピリオドを打ちました。そして、第2の人生のスタートとして、再び母校である福井大学でお世話になることになることは、本当に不思議なご縁であるとともに、感謝の気持ちで一杯です。今後ともどうぞよろしくお願いします。

思い起こせば、昭和59年4月に、全校生徒数が1,000人を優に超える、福井市成和中学校から始まった教員生活。着任した3日後の入学式での体育館で、1年生の担任として生徒・保護者合わせて約900人を前に、大粒の汗を流しながら話をしたことを鮮明に覚えています。

その後、越前市内の中学校で21年、管理職として6年、県教育庁義務教育課等行政職として7年勤務しました。

教諭の時は、担任歴のうち8割強が3年生の担任であり、数年連続で担当することもあるなど、3年生担任・進学主任として、進路指導ばかりをしていた記憶があります。また、バレーボール部の顧問として、休日も関係なく毎日部員とともに汗を流し、各種大会で数々の優勝を獲得した輝かしい思い出がたくさん

あります。そして数学科教員としては、多くの仲間と激論を交わした授業研究をはじめ、全国大会等での発表や研究会の責任者として携わったことも大変貴重な経験になりました。

これらの良き思い出の一方で、生徒指導主事を担当していた時に、生徒の尊い命が失われた、辛く痛ましい事件が何件もあり、今もそれは脳裏から離れることはありません。そしてその経験が、私の教員としての方向性を大きく変えることとなりました。

生徒を失ったことの大きなショックに加え、遺族への対応や生徒へのケア、関係機関との連携やマスコミ対応、自殺の連鎖防止や教職員の役割分担構築など、今までに経験したことがない厳しい事態が連日起こり、学校の日常活動の回復にはかなりの月日を要しました。この事件を通して、生徒や保護者に命の大切さを再認識してもらうこと、必要な人員確保（役割分担）、危機発生時の適切な対応、そして何より校長のリーダーシップが大切であるということを学びました。

この経験から、校長として勤務した2つの学校では、スクールプランの重点目標の1丁目1番地として、「かけがえのない命を大切にする」を掲げて学校運営を行いました。

校長として、この重点目標に関する教職員研修を自ら実施することに加え、生徒、保護者向けに機会があるたびに、「かけがえのない命を大切にすること

についての話をしたり、学校通信やPTA便り等を配付（配信）したりして、その重要性を訴え続けてきました。

具体的には、教職員に対する研修として、①「自殺防止 生徒の変化をいち早くキャッチするのが教職員の重要な役割」②「児童虐待を見逃さないための基礎知識」③「学級または授業担当学級で、いじめられている生徒はいないか？」の3つをはじめとするたくさんの研修を毎月一回行い、共通理解を十分図るとともに、指導の見直しや生徒理解の重要性を再認識させました。

また、生徒や保護者に対しては、全校集会や生徒集会、PTA総会や学校公開等各種学校行事の中で、命の大切さを考えさせる内容の話をしたり、毎月1、2回発行する学校通信の中に、道徳的価値を含んだ資料を取り入れたりして、親子で深く考えられるような手立てを講じました。その成果かどうかは分かりませんが、管理職として勤務した6年間は、幸いなことに悲しい事件や事故は起きませんでした。

しかし、教員人生も終盤を迎えた時、今度は新型コロナウイルス感染症です。

令和2年2月27日、新型コロナウイルス感染症対策本部会議で、当時の安倍首相から突然「全国の小中

学校と高校、特別支援学校に臨時休校を要請する。」との表明があり、現場は大混乱しました。それから学校再開後は、試行錯誤しながら様々な感染症対策を行い、3年目の現在に至っています。

私は厳しい状況に悩み苦しむ生徒に、『部活動や学校行事等が実施できないまたは制限されるなど本当に辛く厳しい日々だと思う。しかし、昔から「明けない夜はない」「やまない雨はない」と言われている。人生においてずっと悪いことばかりが続くことは絶対にはないと信じて、一日も早く通常の生活が送れるよう、全員が心をつにし、この困難を必ずや乗り越えよう！』と、退職の日まで言い続けました。

自己紹介としてふさわしい内容ではなかったかもしれません。しかし、これから先、生命尊重や新型コロナ対策だけでなく、現在起こっている戦争等を含めた重大事案に加え、グローバル化や情報化、少子高齢化など、社会の急激な変化に伴い高度化・複雑化する諸課題への対応が必要となってきます。

教職大学院では今までの様々な経験を生かし、こうした諸課題への対応や、教員研修、資質能力の向上等について協働探究しながら全力で取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。



院生自己紹介

新しい院生の自己紹介を掲載しています。今回は3回目、学校改革マネジメントコースの12名です。



青山 憲枝 あおやま のりえ

今年度より、連合教職員大学院学校改革マネジメントコースに入學しました青山憲枝と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

「先生、ほんと楽しそうね」4月のカンファレンス、最後のグループディスカッションで小嵐恵子先生にこんな言葉をかけていただきました。その通りです。私は仕事が楽しくて仕方ありません。朝起きて「疲れがとれないな〜」と思っても、園舎に入るとたんに元気が出てくるのです。毎日わくわくドキドキして「この仕事が天職だ」と言える私は心から幸せ者だと思っています。

しかし、昔からそうだったわけではありません。先輩から教えてもらうことが全てで絶対解だった若い頃は、自分の保育観など口に出すこともできませんでした。正直に言えば自分の保育観など持っても意味がない、そういう時代だったのです。保育教諭になるのが小さい頃からの夢だったのに、「こんな仕事いつでも辞めてやる」と思うようになっていました。楽しくなかった。結婚を機に現在の園に移りましたが、それなりに器用にこなせる経験を積んただけで楽しさを覚えることはやはりありませんでした。出産を機に退職し、二度とこの世界に戻るつもりがなかった私は育児中に調理師の資格も取りました。それなのに、何を思ったかまたもやこの世界に足を踏み入れるのです。何故か。自身の子育てを通して自分の保育観を見つめられたからだと思います。我が子

は小さくても「自分」を持っていました。若い頃の私は、自分が職場の輪に馴染まなくては生きていけなかったように、子どもたちにも「自分」を抑えて集団から逸脱しないことを強いていたと痛感しました。

復職した私は、少しずつやりたい保育の形を模索し始めましたが、葛藤が大きかったのも事実です。長年の「当たり前」「…でなければならない」のループは想像以上に、変りたい私の足かせになっています。しかし、「本当にこれでいいのか？」という私自身の問いかけに背中を押してくれるのはいつの日も子どもたちです。人と違うことをすると「どうしてしてほしくないことばかりするの？」と目くじらをたてていた私が、最近は「人生楽しんでるなあ」というから不思議です。やりたいことをやったもの勝ちだと思えるようになってきているのです。子どもたちを「集団」という窮屈な箱の中から自由にあげたい。「みんな仲良く」「みんなと一緒に」そんな声掛けが自分の中からなくなっていることに今、気付いています。

「自分」を持ってい。主張していい。みんな違っていい。おかげで1歳児から持ち上がっている今の3歳児は、てんやわんやのバタバタです。でも何故か、好き勝手なこの子らの姿に安心するのです。子どもたちを寛容的に見られるようになると、私自身もまた長所も短所も含め「私は私でいい」と思えるようになりました。無いものに劣等感を抱いて目立たぬように生きるより、「自分に無いものを持っている人に助けてもらい私にできることで返す」という考え方になってから、職場の同僚性も少しずつ高まっているような気がしています。自園の園長が説く、「小さな渦ができることで大きな渦となりうねりとなる」

というそのイメージーションが明確化されていくのを感じます。そう、変わるのは私自身なのです。

自園は現在、「子どもの主体性を育む保育」を模索しています。教師主導の保育から脱却しようという変革期です。この貴重な瞬間に携われることが本当に嬉しい。自分の保育観を持っても仕方がないと思っていた私が、「変わる・変えていく」その一員となれることが嬉しいのです。誰かがすれば良いことではない。私にできることは何なのか。それを、この教職大学院で見つけたいと思っています。4月・5月のカンファレンスを経て様々なコミュニティで語り合う中で、多様な視点で物事の本質を捉えることの意義を感じています。漠然としていた自分の思いが言

語化された時の「腑に落ちた手応え感」は、早くも私の原動力となり現場にもたらす「本当にこれでいいのかな」の投げかけとなっています。これまで当たり前前に続けてきたことは、目的もわからずにやらされ感でこなしてきたことが多い。効率・見栄え・管理重視だった保育教育現場で、子どもも大人も「ひとりひとりが自ら考えて行動し、それをコラボレーションして価値を生み出すチーム作り」を目指したいと志を新たにしています。連合教職大学院というこの貴重な場で学ばせていただけることに感謝しながら、学び続けることの大切さというよりは楽しさを体感していきたいと思います。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。



笈田 美香 おいだ みか

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコース1年履修に入学しました笈田美香（おいだみか）と申します。現在、坂井市立磯部小学校に勤務

しています。国道8号線に隣接し、周りは田んぼに囲まれた坂井市丸岡町にある大規模校（全校生徒数456名・職員数 約30名）です。5年生を担当し、34名の元気いっぱい子どもたちと毎日楽しく！？過ごしています。目まぐるしく毎日が過ぎていく感じです。充実しているということですかね。学級担任以外に学年主任、研究主任、保健主事が主な仕事です。

私の教員生活を振り返りますと、結婚、出産、育児と忙しい間は、仕事と家庭の両立が大変で、仕事では「一番下にいるのが一番楽だな」と思っていました。歳を重ねるにつれて、任せられる仕事も増え、「嫌だなあ、大変だなあ」と思いながらしていたこともありましたが、でも、任せられた仕事は最後まで責任をもって頑張ってきたつもりです。

教員としての一つ目の転機は、NIE実践校でNIE研究主任を任せられたときです。自分にはそんな大役ができるのかと、とても不安でしたが、校長先生（福井大学連合教職大学院におられる永谷先生）が「みんなもしっかりバックアップするから大丈夫や」と後押ししてくれました。その責務をこなしながら、リーダーとして動く楽しさを感じ始めていたのです。その後、研究主任として、NIE全国大会福井県大会で実践報告をするために、学校全体で協働しながら研究を進めていくことになりました。大変なこともありましたが、充実感を味わっていました。

二つ目の転機は、福井大学附属義務教育学校での教職経験です。今までの授業スタイルとは変わり、「子供を待つ」ということ。そして、「子供を見取る」ということ。他の先生の授業を参観したり、自分の授業を公開したりしながら、どういうことなのか、そしてどう教師として振る舞えばいいのか1・2年目は悪戦苦闘する毎日でした。「先生、しゃべりすぎ。出なくていい。子供の考えをつなげることに努める！！」意識していても、なかなかうまくいかないくらい毎日でした。しかし、授業実践を重ねて行く中で、子供の変容（考え・表情・振り返り）を感じたときに、

手応えを感じ、新たな授業の楽しさを味わっていました。また、附属では、大学との連携、今必要な教育を学ぶ・考える・実践して振り返る場が設定されていました。大変な毎日でしたが、公立に戻って思ったことは、大変だった分たくさんの学びがあったことを実感しています。自分の教育に対する見方・考え方が大きく変わったり、自分目線で見ていた思いや考えが、周囲の様子を見渡しながら俯瞰的に考えるようになったり、附属で学んだことをどう取り入れるといいだろうかと考えたりする自分が今いることは、自分の教育観を大きく変容してくれた貴重な経験となりました。

昨年度、福井県のマネジメント研修を受講させていただきました。福井大学連合教職大学院の淵本先生、清川先生の貴重なお話を聞いたり、他校の先生方とテーマに沿って議論したりすることを通して、教師として学び続けることの大切さと自校のために自分に何ができるのかを考えていきたいという思いが

強くなっていきました。その研修の中で、福井大学連合教職大学院 学校改革マネジメントコースにつながるための研修（夏期および冬期集中講座）を受講できることを知り、「まだまだ自分には学ぶべきことがたくさんある！」「学校改革は、授業改革と言われていの中で、研究主任として自分にできること、自分が進めていきたいことを探究しながら自分を高めていきたい」と思い、教職大学院への出願し、入学することを決めました。現段階で、いろいろな壁にぶち当たっている状況ですが、立ち止まりながら省察を行い、教職大学院の先生方や院生の方との対話を通して、その壁をどう乗り越えていくといいのかをじっくり考えていきたいと思っています。自校の子供たちのために、教職員が同じベクトルで協働しながら研究が進んでいくことができるように、たくさんのことを学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



大橋 圭子 おおはし けいこ

「人と語り合うことってやはり楽しい。」改めてこのことを実感したのは、連合教職大学院の開講式でした。

グループセッション

の中で、初めてお会いする方々と、それぞれに目ざしていることや現在の実践について語り合い、聞き合う機会を得たときのなんともいえない心地よさ。緊張して出かけた開講式でしたが、同じグループの方々の話を伺い、自分も話をしていくうちに、その緊張はどこへやら。わかるわかと感じたり、なるほどと納得したり。それは大変だ、自分だったらどうしただろうと考えたり。自分だけではおよそ経験できないであろう生きた実践について聞き語り合う。こ

ういった時間を毎月のようにもてるということが、次第に楽しみになっている自分がいることに気づいた4月2日でした。

38年間の教員生活に一区切り。4月からは再任用という形で、藤島中学校で勤務して三か月が経とうとしています。定年にはなったのですが、自分自身は、もう少しこの仕事に関わっていたかったし、そして、やり残したことは数々あれど、教職大学院で学ぶということを実現したいと思い、大学院を志願しました。前任校でお世話になった、自分もそんな存在でありたいという先生の存在の大きさも、その一つの理由だったのかもしれないと今になって思っています。

さて、自分自身が探っていききたいと考えているのは、自分自身も含めた教員同士が、研究することのよさと意義を実感することのできるチームとして成長

し、また、子供たちが協働することを通して学びを深め合い、未来につながる学力を育成していくことに資する研究の体制はどのようにあるべきか、ということです。これは、前任校で4年間、研究主任を務める中で自分自身が抱えてきた大きな課題といえることでした。

4月。現在の勤務校に異動することとなり、以来この三か月は自分にとっての激動の毎日でした。慣れない環境での毎日は、予想以上に心の疲労感を感じるものでした。でも、なんとか三か月過ごすことができたのは、異動先の先生方、子どもたちに出会えたからだったのだろうと漠然と今感じています。何気ないことを話すことを通して、自分の居場所というもの少しずつできてきたのかもしれない。授業に限らず iPad を使いこなしている子どもたち。この年になってさらに学ばなければならないことが山積している毎日であり、考える以前のところで時間切れになっている感があります。職場という環境が変わるということは、自分のペースをどのように作り出すかということとのせめぎ合いです。もう少しあともう少しの心のゆとりがもてるように、自分にとっての苦手分野である見通しをもって、毎日にメリハリをつけていかなければならないと感じています。

さて、前任校において、参観者にとっては「見取り」「記録する」中で「省察」し自分の授業改善につながるごと、授業者にとっては見取りに基づく記録により、子どもたちの学びを省察し授業改善につなぐ

ことといった授業改善を図る協働体制はいつも変わらぬ必要なものであることを実感してきました。そういったいつも変わらず大切にしていけるべきことを見極め、教師間のつながりを構築することを通して、「研究すること」を学校文化として発展させながら定着させていくことが、どの学校においても必要なことではないかと感じています。前任校での4年間を振り返ると、同僚が負担に感じない研究の体制というものはいかにあるべきか、ということと、授業改善につながる授業公開のあり方をいかにすべきか、ということが、研究に携わらせていただく中でずっと悩むところでした。協働して研究を進めることの意義と、ひいては、それが子どもたちの未来につながる学力を育成していくことに通じることをどうしたらよりよく同僚に実感してもらうことができたのか。反省点でもあり、さらに追究していきたい課題です。研究を効果的に、そして取り組む教員が取り組んでよかったと実感できる研究の体制というものはいかにあるべきか、ということについて、この教職大学院での学びを通して実践を重ね、さらに考えを進めたいと考えています。

また、一方で、定年を迎えてしまった今になってですが、自分の取組を自分が関わってきた国語という教科からも振り返り、いろいろな方策にも挑戦しながら、自分自身のこれまでの学びを省察し意義付けたいと思っています。

お世話になります。こんな私ですが、一緒に語ってやってください。どうぞよろしくお願いいたします。



北村 英之 きたむら ひでゆき

今年度、福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学した北村英之です。教職大学院で学ぶきっかけになったのが、昨年の福井県のマ

ネジメント研修の受講でした。その研修の一環として、福井大学教職大学院の夏のサイクル、冬のサイクル、冬のラウンドテーブルに参加させていただくことができました。いろんな校種のいろんな年齢の先生方の話を聴くことができたり、実践から学んだことについて語り合ったり、これまでの自分自身の実

践を振り返ったりなど、これまであまり経験をしたことがないようなことを経験することができました。この様な経験から、「さらに自分自身の視野を広げたい」と考え、今年度 1 年履修制度を利用して教職大学院で学ぶことを決めました。

教職歴は新採用から 26 年目となります。初任が敦賀市の松陵中学校で 5 年、福井市の明道中学校 3 年、明倫中学校 7 年、福井県特別支援教育センター 3 年、灯明寺中学校 7 年勤務してきました。多くの生徒、保護者、教職員との出会いがあり、多くの経験をさせていただきました。

現在は福井市社中学校に勤務しており、特別支援学級の担任と特別支援コーディネーターの担当をしています。本校は通常の学級が 13 学級、特別支援学級は 3 学級あり、全校生徒 400 名ほどの学校です。

現在の特別支援学級は、知的障害特別支援学級が 1 学級、自閉症情緒障害特別支援学級が 2 学級あり、3 学級合わせて 16 名の生徒が在籍しています。16 名の生徒は個性豊かでそれぞれに得意不得意があります。また、状況が多様で、それぞれに課題やニーズがあります。それらの課題やニーズにより細かく対応しようと、日々特別支援学級担当者中心に、社中学校教職員全員で生徒の支援に取り組んでいます。

今年度、教職大学院で取り組んでいきたいと考えているテーマの 1 つ目が「特別支援学級における探究型学習」、2 つ目が「実際の効果のある校内の特別支援体制」です。

このテーマを設定するに至ったのは、昨年度の夏のサイクルに参加し、長期実践を読み、自分自身のこれまでの実践を時間をかけてじっくりと振り返ることがきっかけとなりました。自分の実践を振り返る中で、その時代時代の生徒の顔が浮かんできました。その時その時は一生懸命に生徒のためを思って授業をしていたのですが、今振り返ってみると、果たして今までしてきたことは、これで良かったのだろ

うか、生徒たちの学びになっていたのだろうかということが頭に浮かんでくるようになりました。こうした思いがあって、特別支援学級において探究をやっていたと考えました。

2 つとも昨年度も取り組んだテーマですが、十分な成果が上がったとは思えず、改善の余地が大いにあると考え今年もテーマに挙げることにしました。

「特別支援学級における探究型学習」の取り組みを通して、特別支援学級在籍生徒にとっての主体的な学び、本当の学びについて考え実践していきたいと思います。そして、実践の成果を、本校の他の教職員にも知ってもらい、通常学級に存在する特別な支援が必要な生徒の支援の参考にしてもらいたいと思います。他の先生方に知っていただく機会としては、生徒たちの学習発表会を企画し、そこに先生方に来ていただく、また、学級だよりを作り読んでもらう、など方法を工夫して、特学の生徒を知ってもらい、生徒たちの良さを感じてもらいたいと思います。

2 つ目の「実際の効果のある校内の特別支援体制」ですが、生徒の情報を教職員で共有する会議の形から、教職員がそれぞれ考え話し合うような研修の形にしたいと考えています。昨年は、2 か月に 1 回、各学年で 1 人支援の必要な生徒を取り上げ支援策を協議していました。しかし、あまり活発な議論にはならず、有効な支援策が出されることはあまりありませんでした。そこで、事例研究という研修に近い形にして、教職員それぞれが自分の立場で生徒について考える、生徒について語り合う場にしたいと思いました。

現在の勤務校で勤務し実践しながら、大学院で学んでいくことで、自分自身の学びを深めるとともに、今の職場に少しでも、できるだけ多くのことを還元していけるように努めたいと思います。どうぞこれからよろしくお願いします。



堂下 行浩 どうした ゆきひろ

今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコース 1 年履修コースに入学した堂下行浩です。現在は、福井市一乗小学校 5・6 年の担任をしています。

一乗小学校は、全校 23 名の完全複式学級の小規模校です。一乗小学校は、かの有名な戦国武将朝倉氏の居城があった一乗谷朝倉氏遺跡のすぐ近くにある小さな学校です。総合的な学習の時間では、5・6 年生は、この一乗谷朝倉氏遺跡について学習し、11 月に実際に学んだことを観光客相手に案内をする「朝倉ガイド」を行います。もし、お時間があればぜひ子どもたちらしいほのぼのとしたガイドを体験してください。きっと心温まるひとときになること間違いなしです。

先日、修学旅行で岐阜県・愛知県方面へ 5・6 年生 7 名と行ってきました。初日、岐阜県山形市立大桑小学校と交流を行いました。大桑小学校とは NHK の大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公の明智光秀つながりで交流が始まりました。そして、この学校も小規模校です（なんと、5・6 年生が一乗小の倍の 14 名もいるんです！）。初めて、学校外で他校と交流をする子どもたち。元気のいい大桑小の子どもたちに圧倒され、初めはもじもじしていたのですが……。スポーツ交流、神社見学（十五社神社には、笏谷石で作られた狛犬があり朝倉氏とのつながりの深さに驚きました）など交流を深めていくうちに自然と打ち解け合っていく姿が何とも微笑ましく感じました。こちらは、大丈夫かなとハラハラしていたのですが。素直で、一生懸命で、本当にかわいい子どもたち。変化の激しいこれからの時代を生きる子どもたちが、自らの可能性に積極的に挑戦し、よりよい社会と幸福な人生を切り開いていけるような力を育てていきたいと思っています。

そのためにも、子どもたちも学校や学級といったコミュニティの中で仲間と協力しながら主体的に学

び合えるよう支えていけるようにするには、どうしたらよいのだろうか。この 1 年、大学院で学ぶ中で自分なりの答えを探っていきたいと思っています。と、同時に、これからは、子どもたちだけでなく、我々教師も学んでいかなければなりません。社会の急激な進展の中で、学校を取り巻く環境が複雑となってきた今日、教職員が抱える課題を解決していくには、知識や技能の絶えざる刷新が必要で、教職員が探究心を持ち、学び続けるだけでなく、お互いが助け合い学び合うことが不可欠であると考えます。

昨年の集中講座で、今までの私自身の教員人生を振り返ってみて、なんと独りよがりの実践ばかりしていたのか、愕然とすると同時に恥ずかしく感じました。そんなエピソードをここで一つご紹介します。私が勤務した 2 校目の雄島小学校でのことです。ここでは、4 年間体育主任をしました。この学校で体育主任としてどうしてもやりたいことがありました。それが、運動会での 5・6 年生による組み体操です。この学校では、それまで組み体操が競技としてありませんでした。職員会議で話をして何とか、やることが決定。流れや子どもたちの技や動きから音楽まですべて私が考えて子どもたちに指導して、それが、形になった時は、本当にうれしかったのを覚えています。子ども自身もそして見に来た親も喜んでいて。まさに、子どもたちと一緒に作り上げている、その時の私はそう感じていたに違いありません。本当に楽しかったし、充実していました。雄島小で勤務した 4 年間、組み体操ができたことは私にとってかけがえのない財産の 1 つです。

ただ、後で知ったのですが、1 年目に組み体操を運動会に取り入れることで、時間の都合上削られた競技が 1 つありました。それが組み体操をすることを支援してくれた他学年の主任の先生が企画した競技でした。私は、よくその主任に、組み体操の指導について相談していました。いつも親身になって相談に応じてくれた先生。まさか、その先生が企画した競技が削られるなんて……。しかし私には、そんなこと

を一言も言わず、若い者がやりたいことをどんどんやれと背中を押してくれました。今、振り返っても本当にありがたいなあと感じます。そう考えると、私は、いつも助けてもらっていたんだなあ（あつ、今も助けてもらってばかりかも知れませんね）、と改めて気づきました。

学校での仕事は、決して自分一人ではできません。私たちの周りにはたくさんの仲間がいて、支えてく

れたことに気づきました。だからこそ、今度は私が仲間を支えていきたいと思います。みんなが安心して、明るく、活気と活力に満ちた仕事ができるために何ができるのか、これから考えていきたいと思います。この大学院で、様々な人たちと熱い話し合いを通して自分なりの答えを見つけていきたいと思います。ここにも、一緒に学び合える仲間がいると思うと、心強く感じています。どうぞよろしくお願いいたします。

豊田 泰寿 とよだ やすひさ



本年度4月より、学校改革マネジメントコースに入学いたしました、福井県小浜市立小浜小学校の豊田泰寿と申します。1年履修のため、今年度末には長期実践研究

報告を書き終えなければならないため、日々どうしようかと焦っています。皆さんとの学びの中で省察しながら、現場での実践を積み重ねていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、教職の経験が25年ほどありますが、なかなか採用試験に合格しなかったことを思い出します。講師をしながら試験を受け続け、合格したときは本当にうれしく、小学生の時から思い描いていた夢を実現した喜びは忘れられません。

採用は、嶺南東養護学校（現：特別支援学校）で、初めての特別支援教育でとても戸惑いましたが、教育の原点ということで、学ぶことはたくさんありました。一人一人の特性に寄り添い、支援をするという考え方は、現在も生かされています。6年間高等部に在籍しており、常に就労や自立ということを目標にして、社会に出てから困らないためにはどうすれば良いかを考えていました。とても毎日にやりがいを感じていたため、ずっとこのまま特別支援学校で勤めたいとも思いましたが、前述の小学校からの夢というものは、「小学校の先生」だったため、小学校に

希望を出して異動しました。それから現在に至るまで、20年間ほどは小学校の教員を続けています。

昨年度、マネジメント研修を受ける機会に恵まれ、事前履修を経て、教職大学院1年履修でお世話になることになりました。学校では、教務主任に任命されて2年目で、学校のマネジメントについて、何ができるか考えていた頃でした。

まず、注意していたことは、「率先すること」でした。学校の活動つまり教育課程が滞らないように、スムーズに動いていくために、常に先を見た行動をとっていかうと考えていました。しかし、教頭から出ていた年間や月間の行事予定を見ながら、週予定や時程について、教職員に伝えていただけでした。これらは当たり前の仕事であって、教務主任としては最低限の業務でした。今から思えば、ただの事務仕事だけで精一杯だったのです。

そこで、1年目に何か学校経営に関わっていけないかと思い、始めたことが「担任者会」というものでした。これは、教務主任が、月1回職員会議の後の30分程度、各学級担任を集める会です。教務主任として提案をするのですが、それ以外に学級担任として共通理解をしたい内容を確認したり、管理職からの意向を伝達したりする場でした。この会を活用して、次の3つの取組を進めていきました。①ふるさと教育の推進 ②自分からあいさつできる児童の育成 ③ICT機器を指導できる教員の育成です。①に関しては、

学習のフォーマットづくりとPDCAサイクルの確立を主に進めていきました。②に関しては、あいさつ標語を提案し、各学級や委員会等で進めてもらいました。③に関しては、苦手な教員も使わざるを得ない環境づくりを進めていきました。それぞれ、こちらから担任者会を通して「仕掛け」をつくることにより、活性化することができました。

さて、教務主任3年目には、以上の取組を更に進め、「カリキュラム・マネジメントの視点から見た『ふるさと学習』のさらなる発展～授業改善とICT機器活用のベストマッチを目指して～」というテーマで、社会に開かれた教育課程の下、地域の人的・物的資源を十分に活用した学びの構想から地域を巻き込んだ「ふるさと学習」を推進できるようにということと、ICT機器を「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善にどう活用していくべきか、「個別最適な学習」から「協働的な学習」に活用するためには、各学級担任にどのようなサポートとリードが必要かを追究していきたいと考えていましたが、4月の異動で学校が変わってしまったので、現在はとても悩んでいます。新しい学校で、どのようなマネジメントを考え

ていくべきかを。今の段階では、前任校で実践していたことを生かして行こうと考えています。それは、①地域連携について ②ICT機器の活用・推進について ③業務改善（働き方改革）についての3点です。これらの取組に関しては、前述の「担任者会」をフル活用していきたいです。管理職の考えを各担任に伝える場であり、各担任の声を学校運営に生かせる場であり、教務主任として取り組みたいことを実践していくための場でもあるため、考えていることを実行する場としてはふさわしいと考えているからです。

教務主任というものは、管理職とは違いますが、教育課程の中で学校経営に参加することは十分可能で、校長の監督を受けながらではありますが、教育課程の中から「学校をうごかしてやろう！」という気持ちが必要なのではないかと思っています。それが学校マネジメントというものであると理解しています。この一年間、各担任と管理職の間で、調整が必要な場合は、どんどん「率先して」動けるようにしていきたいです。そして、学校がチームとして動けるように、間を埋めるような存在でありたいと思っています。



西片 善江 にしかた よしえ

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコース（一年履修）に入学しました西片善江と申します。福井市教育委員会事務局学校教育課所属の指導主事をしています。主に幼児教育、幼児教育と学校教育の接続に関する業務を担当しています。公立幼稚園の運営、管理や指導、幼保小の滑らかな接続のための業務を行っています。公立幼稚園は園数・園児数ともに減少していますので、福祉保健部との連携も大切です。

「主な」といいましたが、教育委員会の業務は多岐にわたっています。学校教育課では、指導主事(9人)

と事務方職員が協働して福井市の幼稚園・小学校・中学校に関わる学校教育の運営及び管理、就園・就学及び転出入に関する業務、幼稚園及び小中学校の学習及び指導に関する業務を行っています。ちなみに、ジョブローテーションによる今年度の私が担当する業務は、「生活科・総合的な学習の時間関係」「音楽関係」「いきいきサポーター（会計年度職員）関係」「学校評価」「学校教育方針」「福井市教職員研修」等です。

私が福井市の小学校での勤務を離れて現職に就いたのは、令和3年の4月です。異動が決まったとき、実はとてもショックを受けました。なぜ自分なのか。勤務校の子供たちの成長を見守れないことの寂しさ。そして、「教育行政」という未知の仕事への不安でい

っばいでした。なんの根拠もないのですが、どちらかというマイナスなイメージを持っていたからかもしれません。福井市では年に2回指導主事による学校訪問が行われるのですが、研究主任として学校の授業研究の良さや教職員の協働の高さを伝えなければ、と緊張して迎えていたせいかもしれません。

しかし、勤務を始めてみると「子どもたちの学びを豊かなものにしたい。そのために学校を支えよう、働く先生方を支援しよう」という人でいっぱいの職場でした。職種の必要性もあり指導主事はよく勉強をしています。そういった姿を見て、学校で直接子どもたちの指導をすること以外にも、福井市の子どもの学びを支える手立てがあることに気づきました。実際忙しいこともあり、寂しい等といっていられない状況でしたし、未知の仕事で不安だと嘆く暇があったら勉強しなければと、無理にでも前を向いて仕事に没頭するようにしました。その過程で、「学校改革とはなんだろう」「そもそも必要なのか」と疑問が出てきました。子どもの学びが変わる今、学校・教師も変わっていくことが求められています。現場とは少し違った立場から、学校改革を支援していくため

にどうすればいいのか、どのように変わることが求められているのか学びたいと考えました。そこで福井県の「マネジメント研修」を受講しました。前任校に御協力いただき、現場での実践を行わせていただくことになりました。思うように進められず乗り越える壁もありました。夏と冬の4つのCycleとラウンドテーブルで、語り合いを通して自分の教師としての歩みを振り返り、実践の省察を行いました。自分の考えや今実践していることを整理できたり、一見関係ないようなことが自分と重ねて考えてみると大きなヒントになったりと、対話の中で学ぶ深さと「理論と実践の往還」の大切さを実感することができました。特に夏のCycleでは、じっくりと資料を読んで考えるというとても贅沢な時間を持つことができました。

教職大学院でのこの一年は、出会う方々の語りに耳を傾け、皆さんの多様な経験に触れることで「学校を改革していくマネジメント」に対する自分なりのビジョンを見つけたいと考えています。そして、その一粒となるような実践を行い、働く先生方や子どもたちのためになれたらと願っています。

前田 浩尚 まえだ ひろたか



今年度より、福井大学連合教職大学院・学校改革マネジメントコース（1年履修）に入学しました、前田浩尚と申します。現在、若狭町立瓜生小

学校に勤務し、研究主任と4年生担任を務めています。昨年度、私は県のマネジメント研修に参加させていただくと同時に教職大学院に向けての事前履修という形で、大学院での学びに参加させていただきました。いろいろな立場のみなさんとの対話をする機会を得たこと、じっくりと理論を学ぶ機会を得ることができたことに感謝しています。

昨年度の1年履修に向けての事前履修では、採用されてから二十数年間の歩みを振り返り、大切にしてきたことや弱みを把握することができました。これまで日常の業務に追われ、自身の取り組みを言語化することがなかっただけにこれまでの歩みを振り返り、言語化する機会はとても貴重な機会となりました。これまでの教員人生で大切にしてきたことはコミュニケーションを積極的にとることでした。初任者の時には休憩室や打ち上げの場。学年主任の時には放課後の職員室や教室に向かうまでの廊下や階段。体育主任の時には器具庫やグラウンド。これまでの取り組みを振り返ると積極的に場所や時間を見つけ、コミュニケーションをとってきました。積極的にコミュニケーションをとることで作業の効率が上が

り、より良い成果を上げることができたように思います。教員生活を振り返る中で、強みだけでなく弱みについても自覚することができました。

また、事前履修では「コミュニティ・オブ・プラクティス」をじっくり読み解き、みなさんとの対話を通して学校という組織の在り方について考えることができました。これまで、ひたすら実践を繰り返してきた私にとって理論書を読み、理論と実践を往還するという経験はすごく新鮮でした。「コミュニティ・オブ・プラクティス」から学んだ、コミュニティを活性化させるための手立てを初めとする様々な理論は、今年度の研究に生かされています。

昨年度の学びを受けて、今年度は研究テーマを「スクールプランの具現化に向けた組織マネジメントの在り方」と設定しました。研究主任という立場から、以下の2点を意識して全職員を巻き込みながら学校教育目標の達成をいかに図るかということを研究していきたいと考えています。

① 年間を通して学校教育目標を意識しながら取り組みを進めていける手立てをとる。

② それぞれの取り組みが連動するような組織マネジメントをしていく。

今年度がスタートして3ヶ月が経過しようとしています。どのように全職員を巻き込んでいくか、それぞれの行事をどのように連動させていくかなど悩みはつきません。そんなときは現在の楽しみである、漫画とジョギングで気分転換を図りながらカンファレンスでいただいたみなさんからのアドバイスを反芻し、新たなアプローチを考えています。まだまだこれからいくつもの壁に当たり、悩み、省察しながら進んでいくでしょう。そんな時はカンファレンスでのみなさんとの対話や先輩方の長期実践に書かれた様々なヒントをもとに省察をくりかえし、がんばりたいと思います。また、本校には教職大学院を修了した先輩がいます。このような恵まれた環境の中で教職大学院生として学ぶことができることを幸せに感じ、がんばっていききたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

勢いよく回る“コマ”になる

道場 康智 みちば やすとも



「安定している」とは何か。

我々人間は、安定を求めたがる。安定した生活、安定した仕事、安定した収入、安定した結果、安定した人生…。私自身も周りの

人に変わらず、これまでの人生で「安定」を求めてきたように思う。

現在、世界は加速度的に進化し、未来は予測不可能な時代になっている。変化の予測さえ困難であり、激動の時代である。そのような中であって、我々が求めたがるような「安定」は、いかにして生み出すことができるだろうか。

今ではもうやることも、見ることも少なくなったコマ回しの「コマ」。幼い頃はまだ、コマに紐を巻き付け、勢いよく回し、誰のコマが最後まで回り続けるのか競ったものだ。最後まで回り続け、勝利を収めるためには、勢いよく回すことが必要だった。コマを勢いよく回すと、その勢いがあればあるほど一見止まっているようにさえ見えた。勢いがあればあるほど、近くにある障害物に多少当たってもびくともせず回り続けた。勢いがあればあるほど、コマは安定して回り続け、そして最後まで倒れない。コマを勢いよく回せば、安定が生まれるのだ。決して、止まっているわけではない。勢いよく回るコマは、倒そうとしても何とか堪えようとし、最後まで粘り強く回り続けよう

とする。そして、コマは勢いを失い、動きを止めれば、倒れる。

さて、本当に止まっているコマはどうだろう。接着剤で軸の部分の固定した状態で止まっているコマ。ちょっと力を入れれば、ポキッと小さな音を立てて簡単に倒れる。固定部分が取れてしまえば、粘ることもなく簡単に倒れる。接着剤で固定し、一度は「安定」を手に入れたようにも見えるが、少しの衝撃で簡単に倒れるのだ。「安定を手に入れた」と喜んでいても、その安定は簡単に失うことになる。

我々人間も、今「勢いよく回り続ける」ことが求められているのではないだろうか。勢いよく動き続けるからこそ、激動の時代にあっても、多少の変化や障害物に当たっても、びくともすることなく安定していられる。動きを止めた瞬間に、安定を失い倒れる。本当の安定は、動き続けるからこそ得ることができるものであり、変化にも対応できるのであり、障害にも耐えうるのだ。毎日、毎日、勢いよく回る。いや回す。勢いが弱まりそうになったら、また回す。これこそが、本当の安定をもたらしてくれるのではないだろうか。

「これまでうまくいっていたから、同じやり方で、同じ結果を生み出していれば問題ない」という時代は終わった。加速度的に進化し、変化し続ける世の中で、これまでと同じやり方で同じ結果を生み出そうとして動きを止めれば、瞬時に安定を失い倒れることになる。私たちは動き続けなければならない。勢いよく動き続けるからこそ、本当の安定が得られるのだ。次から次へと、新たな挑戦をし続け、前へ前へ進み続けるような推進力を持つ必要がある。力強く前へ進み続けられれば、変化や障壁があってもびくともすることなく安定していられるのだ。

私は、少し前までは「固定されたコマ」のような安定を求めていたように思う。授業で、昨年感触のいい授業ができたから、翌年も同じように授業をして、同じような感触を手に入れよう。受け持つ軟式野球部で、選手の反応も良く、満足のいく結果を手にしたから、今後も同じような指導を続けよう。学級運営で、手応えのある運営方法を見出し、進級や卒業の際に

も多くの生徒が「この学級でよかった。楽しかった」と口にしていたから、同じような運営方法で次の学級運営をしよう。生徒指導で、ある事案への対処がうまくいったので、今後も同じ方法で指導に当たろう……。私自身の中で、うまくいったやり方を踏襲し、同じやり方で同じ結果を求め続ける傾向にあったことは否めない。しかし、同じやり方をしている、同じ結果は手にできなかった。「去年はうまくいったのに……」「前回は手応えがあったのに……」。

もちろん、うまくいったことや手応えのあったことにはそれなりの理由がある。だからこそ、そのやり方が間違っているわけではないし、うまくいったことをやり続けることを否定しているわけでもない。ただ、ある種の安定や成功を手に入れたと思っても、その安定は脆いものなのだ。新しいことに挑戦し続けること、うまくいったことや手応えのあったことにも、さらにアレンジを加えて、よりよいものを求め続ける姿勢が大切なのではないかと思う。

最近では、挑戦し続けること、新しいことをやってみること、少しでもアレンジを加えることなどを私自身のモットーにしている。教育活動についても、また私的なことについてもだ。選手として、指導者として携わってきた野球も、運営側として係わり、さらに今は審判という世界で指導者との二刀流に挑戦している。趣味は読書と筋トレだ。そして今、本業としている教育活動への挑戦として、新たな学びを求めて教職大学院に入学させていただいた。ここでの人との出会いや学びは、本当に新鮮で貴重なものとなっている。

激動の時代の中で、過去に満足することなく挑戦し続けて、毎日毎日勢いよく回る“コマ”でありたい。そして、私の生き方に触れた子どもたちに、少しでものびのびと力強く成長し続けてもらいたいと思っている。勢いよく動き続ける生き方をし、本当の安定した人生、安定した未来を送ることができる自分でありたいし、周りの子どももそうあってほしい。

色々挑戦しすぎて、「どこを目指しているの?」とよく聞かれる。私にとって最大限の賛辞だ。



武藤 基彦

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました武藤基彦と申します。講師歴を含めると20年ほど教員として勤務したことになり、教員人生の折り返しを過ぎた所となります。取得免許は、小学校、中学校（社会）、高等学校（地理歴史）ですが、講師の時に1年間特別支援学校に勤めた以外、小学校の勤務を続けています。最近発展的解消した教員免許更新講習を2回受講しました（その節は福井大学様にお世話になりました）。教員免許の有効期限が延びたところで、大学院を無事卒業できれば「学士」から「修士」にパワーアップすることになりそうです。

勤務した学校では、体育主任で学校全体を動かすこと、ICTが盛んになってきたころの情報主任、社会科主任として県の大会に関わることなど様々な経験を積むことができました。

現在勤務しているのは、越前市吉野小学校です。5年生の学年主任と研究主任を任されています。昨春秋に校長先生から「教職大学院どう？」と声をかけられ、そんなつもりは全くありませんでしたが、教員人生の折り返しも過ぎ、一度自分が歩んできた道を見つめ直すものいいかと思い、受験を決意しました（考えたのはたった2日間でしたが・・・）。

日々の仕事に追われる中で教職大学院での学びを深めることができるだろうかという不安はありますが、日々子どもたちに「やってみよう！」と声をかけている手前、私自身もとりあえずやってみよう！精神で何事にもチャレンジしていきます。



20年ほど教員歴がありますが、中々教員採用試験に合格することができずに教諭として採用になったのは、33歳でした。初任者でしたが、年齢はそうではありませんでしたので、じっくり授業力を高める

むとう もとひこ

こともできませんでした。そんな私を支えてくださった先輩方に助けてもらいながら、日々過ごしていました。

そこで出会ったのが、現在は校長としてご活躍のT先生です、T先生は当時教職大学院で学んでおられ、そこで「省察」や「協働」について教えていただきました。が、当時の私はあまりピンときておらず、「そんなもんか」と思っていたのを今思い出します。今思うと「ちゃんと学びなさいよ」と十数年前の自分に声をかけたくります。それが何かのご縁で私が教職大学院で学ぶことになりました。T先生と出会ったのも偶然。私が教職大学院で学ぶようになったものの偶然。これをチャンスと捉えられるようにします。そして、経験を積み、学校でもそれなりの立場となったからにはT先生から教えていただいた「省察」や「協働」についてしっかり自分なりの学びを進めていきたいと思っています。



現在勤めている吉野小学校は、年々若い教員が増えていっています。どの教員も「児童とどう接すればいいか」や「子どもが分かりやすい授業がしたい」という熱い思いを持っています。日々熱心に教材研究に励み、体当たりで児童と接しています。彼らが毎日奮闘している姿を見ると頭が下がります。私自身ももっとできることはないかと思うようになりました。今までは自分自身の力を高めるだけでよかったですが、この歳にもなれば周りの力も高めるようなことをしなければと思うようになりました。

また、学年主任や研究主任という立場でアドバイスを送ることはあっても、果たして自分事として彼らの思いや悩みに応えてあげているのだろうかということも感じています。その思いは、4・5月合同カンファレンスでも若い先生方が授業改善などで熱く語っているのを聞くと、ますます強くなっています。

若手の思いに応え、ベテランと若手を上手くつなげていくことで、教育課題について協働しながら解決できる組織づくりを研究推進という視点で考えることが当面の研究課題になりそうです。



入学して2ヶ月が経ちました。正直合同カンファレンスの前日は体も疲れていることもあり、気が重くなります。当日の朝も足取りが重いです。しかしながらクロスセッションで様々な年齢、立場の方と話し合う、いや語り合うことで不思議なことに明日への活力がみなぎってくるのを感じます。次の週から

「あれしてみよう」「うちの学校ならこんなことができるな」と考えられるようになってきました。

5月の合同カンファレンスで「たくさん教えてもらいにきました」と自己紹介したところ、「教職大学院は教えるところではなく学び合う場です」とおっしゃった方がいました。教職大学院での学びがますます楽しみになってくる一言でした。「学び合う」という精神を教室や職場でつくり出せるように、大学院での学びを深めていきます。また、教育に関わること以外にもみなさんと交流を深めることができたと思っています。どうかよろしくお願いします。



村地 和代 むらち かずよ

初めまして。今年度より学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました村地和代と申します。現在は、滋賀県教育委員会事務局

幼小中教育課の指導主事をさせていただいております。主な担当は幼児教育です。

私は大学を卒業後、滋賀県内の小学校に勤務をしました。その当時、教頭として赴任してこられた谷口茂雄先生(前湖南市教育長)との出会いにより、私は、国語の授業づくり、研究の楽しさに開眼しました。谷口先生からは、「命、人権にかかわること以外はなんでも挑戦してみ」、「教師が子どもと関わる時間が最も長いのは授業、授業で勝負できる教師に」、「一人ひとりの学び方は違う、その視点に立つ授業改善を進めていくべきだ」と様々に御指導いただくとともに私の背中を押していただきました。谷口先生をはじめ、多くの先生から学びを得ながら授業実践を重ねることができました。授業が変わると子どもが変わる、子どもが変わると学級が変わることを実感し、子どもと共に創る授業が楽しくてしかたありませんでした。

平成26年から、湖南市教育研究所研究員、平成28年から滋賀県総合教育センター研究員として勤務することになりました。平成28年は、「学ぶ力向上のための研究員派遣による学校支援の在り方Ⅱ—入門期の学びの基礎の視点を取り入れた主体的・協働的な学びを育む国語科の授業改善の在り方—」をテーマに小学校1年生を対象とした研究をした後、平成29年は、『『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえた小学校入門期への円滑な接続に関する研究—言葉による伝え合いを軸とした学びを育む『一幼児の遊び・児童の学び—ジョイントブック』の作成—』をテーマに幼小接続について研究をしました。

幼小接続の研究では、園児の学びの豊かさに驚き、幼児教育の奥深さ面白さに刺激を受けました。園児の学びの姿、その素晴らしさを伝えたい！その思いでまとめたのが、「一幼児の遊び・児童の学び—ジョイントブック」です。この研究がなければ小学校教育という狭い視野でしか教育や子どもを見ることはなかったのだと思います。

平成30年からは、再び湖南市に戻り、湖南市教育委員会事務局学校教育課指導主事として勤務し、学力向上に関わる仕事を担当することとなりました。本市の幼小接続の取組は全く進んでいない状況でし

た。幼小接続の研究を生かしたいと意気込んでいたにも関わらず、学力向上の仕事や小・中学校の学校訪問、指導に終始することとなり、結局、市の幼小接続を進めることはできませんでした。一人の思いだけでは、幼小接続の取組を進めることはできない、現場の先生に幼小接続の必要性を理解してもらったり、組織の方針や仕組みを整えたりすることが不可欠なのだと痛感しました。

そして、令和3年から、滋賀県教育委員会幼小中教育課指導主事として幼児教育を担当することになりました。本県では、幼小連携・接続に関する事業である「学びに向かう力推進事業」を実施しています。令和2年度からは、指定校園へ小学校教員を加配し、加配教員が週3日程度、幼児教育施設で保育に参加し、園での取組や幼児の学びの姿をつなぐ役割を果たすことができるようにしています。指定校園は熱心に取り組んでいただいているものの、県内全体の幼小連携・接続の状況については地域差が大きく、小学校側の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への理解は進んでいないと感じました。また、私の所属する幼小中教育課の幼児教育の担当者は私一人であり、

どのようにすれば、県内全体へ普及できるのか解決策を見いだすことができないまま、1年が経とうとしていました。

そんな中、本県の幼小接続事業に御指導いただいた岸野麻衣先生から、教職大学院のことをお聞きしました。教職大学院で幼児教育について学びなおしたいという気持ちと仕事との両立が可能なのかと迷っていましたが、令和4年度から新たに始まる文部科学省の委託事業「幼保小の架け橋プログラム事業」に本県が応募すると決まったことで私の決意は固まりました。教職大学院で様々な先生方と交流し、その経験や考えを知ること、幼小接続を県内全体へ普及するような糸口が見えてくるかもしれない。また、自分自身が悩みや考えを語ったりすることで、気づきが生まれるかもしれないと考えたからです。

これから、2年間、教職大学院で学ぶことができることに感謝し、楽しみながら「幼保小の架け橋プログラム事業」も進めていくことができるようにしたいと思っています。また、できる限り対面で学ぶことで福井での学びを満喫しようと考えております。みなさん、どうぞよろしくお願いします。



本村 税 もとむら みつぐ

初めまして。今年度より学校改革マネジメントコースにて勉強させていただきます。本村税と申します。福井からは遠く離れた沖縄県宮古島からお世話になっています。今年度より、沖縄県教育庁宮古教育事務所で勤務しております。学校現場の教諭から、教育事務所の指導主事へと仕事の環境ががらりと変わり、あたふたと日々の業務に追われながら3か月が過ぎたところです。

私が生まれ育った島について紹介させてください。私は宮古島と石垣島の間に位置する多良間島という小さな島に生まれ育ちました。人口1200名ほどの島で、信号機が1か所しかなく、人間より牛の数が多く、夜8時にはお店が閉まるが、おじいさんが営む散髪屋さんは朝6時には開店し賑わいを見せる、という田舎ならではの自然豊かで様々な生き物がいつでも手の届く範囲にある環境がそこには広がっていました。自然とのふれあい、体験の中でいろいろなことを学んだと同時に物事に対しての興味関心、好奇心が自ずと身につく環境で過ごせたことで「体験から学ぶ」という、私の教師としての信念を身に付けることができたことにありがたさを感じています。

中学校の理科教師として子どもたちにいかに体験させるかをモットーに授業づくりに取り組んできました。小さな体験から学ぶ子どもたちの輝く眼差しに共感するとともに、子どもたち自身で学びを獲得していく姿は教師としての何よりの喜びとなり、原動力となりました。新たな体験的な学びから始まる主体的で深い学びをどう展開し、どのような資質・能力を育てていくかを常に模索しながら教師生活を歩んできました。

これまで教務主任、研究主任、学力向上推進担当といった分掌を預かってきた中で、特に授業づくりを基盤とした組織としての学力の向上に力を注ぎました。研究主任と連携し生徒の学びに対し、教科の枠を越えた、授業実践で工夫する視点を焦点化した授業スタイルの検討、共通実践を図り、学校組織として協働し、子どもたちの主体的な学びへの方向性を持った授業づくりに努めてきました。また、小中9年間の学びのつながりの構築に向けた小中連携の推進としての取り組みにも達成感を感じました。校種間を越えた職員の交流をもとに研究会をもち、9年間を通して身につける資質能力の明確化、9年間を通した学習スタンダードの立ち上げ、授業への位置付け等、少しずつではありましたが、小学校と中学校、そして地域で協力して子どもたちを育てていくという共通認識が広がっていったことにうれしさを感じました。

今年度4月より教頭職昇任とともに、教育事務所への配属となり、これまでの学校現場での教諭の立場からの環境の変化はもちろん、職務内容も大きく変化し戸惑うばかりの4月でした。そんな折、ダメ押しの新型コロナ感染、自宅からふらふらしながらオンラインで講義を配信するという一生の思い出となるであろう指導主事としての講義デビューを鮮明に

記憶しています。事務分掌として教科以外に経験研修等の若手教諭育成、小中連携、環境教育等を預かっており、各種研修の企画、運営などを通して指導主事としての職務を少しずつ学んでいる段階です。

激変した職場環境の中で、先輩主事との協働が何よりの学びであることを日々実感しています。単に職務に関する手順や方法等の助言だけではなく、例えば研修会の企画においてどのような目的を見据えた研修会にするのかといった構想や考えを求められ、計画を練り直し、実施にこぎつけられたことは新たな試練でありましたが、大きな自信につながるものでもありました。

教職大学院では教師一人一人が自身の教師としての資質・能力の向上を実感できるような体制の確立へ向けた各種研修の実施、充実を図るための方策などを学んでいきたいと考えています。これまでの先人達の実践例や理論をもとに自校や地域の実態をふまえた研修会の企画、実践し学びの環境を開発していくための管理職としての資質・能力を高めていきたいと思っています。また教科を越えた職員相互の同僚性を生かした取り組みをさらに活性化させ実践していくためにも、私自身が、様々な立場におられるほかの院生、大学の先生方との「語り合い」を通して体感し、その実践からの学びを獲得していかなければならないと考えています。多くの方々と出会い、ふれあいの中でいろいろなことを学ばせていただけることに感謝しております。

教職大学院での2年間の学びが、学校、地域の先生方へ繋がり、そして子どもたちへ沁み渡り、巡り巡って生まれ故郷の多良間島の信号機が増えるほど、生き生きとした地域社会の創造に貢献出来たらとの思いがふつふつと湧き上がってきています。どうぞよろしくお願い致します。



吉田 英史 よしだ えいじ

こんにちは。私は今年度学校改革マネジメントコースに入学しました福井県教育庁の吉田と申します。現在は教育庁高校教育課で主に教育相談を担当しております。

教員としては20年高等学校の地理歴史公民科を担当してきました。教員になりたてのころから、地域を教科書として、歴史を学習することに主眼を置いて授業をしてきました。まだ探究活動という言葉はなかったですが、授業ではフィールドワークを行い、生徒がテーマを設定して地域学習を行ってきました。

昨年度まで福井県教育総合研究所に所属しており、探究活動担当として総合的な学習の時間の推進および主権者教育担当として新科目公共を見据えた探究的な教材作成などを行うなかで、教職大学院の木村優教授や橋本康弘教授には大変お世話になりました。研究所では県全体で探究活動のモデルとしての活動や教材を作成するという事で多くの先生方とつながりを作って研究を行うことができました。特に課題解決型モデル開発においては評価と課題の設定をテーマに研究を進め、教材化したり動画を作成したりしてきました。

私が県内で探究的な学びを推進するにあたり、大きな壁と感じたことが「学習評価」です。特に昨年度は県内の3分の2ほどの高等学校で学習評価についてお話しさせていただきましたが、今までのペーパーテスト中心の成績付けと学習評価の違いについてなかなか伝わらないもどかしさや、探究的な学びを進めるために必要な見えにくい学力のみとり方など学習指導要領で求められている学びが理解しにくい現状であることに気づかされました。特に総合的な探究の時間では評価基準を設けずに、活動ありきになってしまい、何のための探究であったか、生徒のどのような資質能力を育成すべきかわからないまま学習が行われている事例もたくさんあります。ペーパー

テストのために私も高校教員時代に探究活動と調べ学習の違いを理解できていなかったり、生徒の課題設定に関してなにも理解できずにサポートできなかったりという苦い思い出があります。一方で、全国でもモデル的に活動を行っている若狭高校では教員が何のために探究をおこなっているのか、生徒のどのような資質能力を育成するのかというコンセンサスははっきりしているため、地域が生徒を指導する、教員が生徒を指導するだけでなく生徒同士で伝え合う、という雰囲気を強く感じることができました。

学習評価につきましては教職大学院の遠藤准教授のお力を借りながら昨年度は勉強させていただきましたが、今後さらに探究的な学びが進められていく福井県において今までお力を借った教職大学院の先生方の下でさらに学びを深めていきたい、と考えるようになりました。

私が教職大学院で学びたいテーマは探究活動と学習評価です。総合的な探究の時間はもちろんですが地理歴史・公民科では今までテストのために暗記し、テストが終わると忘れる、一問一答式の授業やテストに偏る傾向がありました。このような教科においても探究的な学びは今後推進されていきます。知識を覚えるために学ぶのではなく、授業で知識を使っていくことが求められ、数値では測りにくい学力が必要とされる中で、学習評価は極めて重要です。知識・技能は分かりやすいですが思考判断表現は応用問題であるという誤解があったり、主体的に学習に取り組む態度に関しては内容そのものの理解が進んでいないのが現状です。

今まで教職大学院で先生方のお話を伺っていると同じような危機感を持たれており、試行錯誤されていらっしゃると思います。現在は現場から離れているため、先生方から多くの刺激を受けながら学んでいきたいと考えております。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

現状を受け止め、前に進むために

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

窪田 真一

今年度から福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程（以下、附属前期）という新たな環境でインターンシップ（以下、インターン）を始め、早3ヶ月が過ぎようとしている。さらに、附属前期ではインターンに加え非常勤講師としていくつか授業を担当する機会をいただき、日々、新たな課題に直面し試行錯誤を重ねながら子どもたちと共に学んでいる。本稿では、この3ヶ月間で実際に子どもと関わる中で考えたことや自身の変容を振り返る。

昨年度は福井市至民中学校にて音楽科での学びを中心に据えながら、授業研究や学級経営、生徒指導など多岐に渡って先生方から学ぶことができた。さらに、授業実践とその省察を学校全体で取り組む機会を通して様々な教科の先生方と言葉を交わし、考えを広めるきっかけになったと振り返る。昨年度のインターンでの経験を総じてまとめると、〈つなぐ〉ことを意識していた。子どもの過去と現在をつなぐ、子ども同士をつなぐ、学習と生活経験をつなぐ、教科を横断して学びをつなぐなど、〈つなぐ〉の中には様々な意味が含まれている。それらがインターン生から教師（非常勤講師）という立場に変わったときにどのように見え方が変わるのか、9年間の音楽科での学びの全体像をつかんだうえで現場（来年度の採用が小学校である）に出たいという思いから、学校・校種を変更して附属前期へとインターン校を変更した。

「まったくうまくいかない」それが、附属前期で非常勤講師として授業を担当して3ヶ月が経った現在

の正直な感想である。昨年度との大きな違いは、〈思考と実践をつなげているかどうか〉だ。昨年度は、授業を見る際に子どもの姿を中心に捉えて解釈し、そこから授業実践について考察していた。授業実践といっても1つの学年の1つの単元に時間と意識を注ぐことができたが、今年度はそれを〈継続〉することが求められる。さらに、附属前期では音楽の他に2教科を担当させていただいており〈初めて担当する教科の授業をどうデザインするか〉も新たな課題だと実感している。それらの課題を改善するきっかけはこれまでのインターンや金曜カンファレンス（以下、金カン）に転がっていたのだ。その中でも、私自身が大切だと実感しているものを2点紹介したい。

最初に感じたのは〈先生方との協働〉である。これまでもインターンでの先生方とのコミュニケーションの大切さを実感してきたが、授業を担当することになってよりその重要性を感じている。授業での子どもの様子やトラブルが生じた際の情報共有など、子どもを中心として先生方とコミュニケーションをとることが多い。その際（まだ十分にできているとは言い難いが）、昨年度に先生方とのコミュニケーションを意識したことは、とても大きな糧となっている。授業を見させていただいた後の見取りの共有や困りごとの相談など、隙間の時間を活用して先生方と繋がる意識をもって過ごしたい。

2点目は〈授業の見方〉である。現在、金カンにて授業をどの視点で見るか、自分が何を大切に授業

業を見ているかについて授業記録を基に省察する時間を設けている。その議論の中で、授業を参観している立場であるが、発問や課題設定、活動の流れを授業者としての意識をもって見ることや、授業の中での個と集団の視点の変化、子どもの様子を捉えてその実態に応じた手立てを講じる重要性を学んだ。このように院生同士で語り合う機会があったことで、〈子どもの学び方を学ぶ〉〈子どもとのやり取りを通して思考を整理する〉〈授業者の解釈と子どもの思考を一致させる〉という視点を得ることができた。授業記録を検討することで自身の授業力が向上すると分かったが、今後はそれを継続し、習慣化していくことが大

切だ。それをいち早く習慣化させて生活に組み込むことで、時間がない中での振り返りのハードルを下げるができる。この経験を繰り返すことで省察するサイクルをつくり、子どもの学びへと繋げていきたい。

未だ分からないことだらけではあるが、大学院という貴重な時間を有意義に使い、地に足を付けて自身の学びを一步一步進めていこうと思う。そこで経験したことを授業実践へと繋げられるよう、日々精進していきたい。

経験を自分のものにするための時間

授業研究・教職専門性開発コース2年/岐阜聖徳学園大学附属中学校

前田 光哉

現在、私たち岐阜拠点のストレートマスターは基本毎週木曜日に岐阜で週間カンファレンスを行い、月間カンファレンスがある週は木曜カンファレンスの代わりに、福井で行われる金曜カンファレンス(対面)に参加している。

まず、カンファレンスでの具体的な活動と学びについて述べる。木曜カンファレンスでは1・2の時間にM2は「自己の研究」について、M1は「インターンシップでの学び」についての振り返りを行い、3の時間で協働して理論書を読み解く取り組みを行っている。金曜カンファレンスでは福井で展開されている学びに合流する形で、1の時間の振り返り、2の時間の企画、3の時間の運営会議に参加している。

この中でも、特に「振り返りの時間」はかなり頭を使う。例えば、「話すとき」、相手に自分の体験を分かりやすく伝えるために、必死に頭の中を整理し、言語化する。相手の反応を踏まえ、改めて自分の体験を見つめる。このプロセスの最中に自分の課題が明らかになることが多い。また、仲間の語りを「聞くとき」は、質問をするために相手の話について「自分は何が

分かっている何が分かっているか」を常に頭の中で整理している。芯を突いた質問は、語り手に新しい視点を与える。週間カンファレンスをはじめとする語り合いは、「対話的な学び」のヒントを与えてくれているような気がする。2年目も頭をフル回転させて、学びを発展させていきたい。

現在は岐阜拠点の学びの体制は整い、学びも充実しているが、実はこのような週間カンファレンスの形が確立されるまで約一年かかった。岐阜拠点のストレートマスターは私たち2年生が1期生であり、前例がなくすべてものが手探りの状態から大学院生活が始まった。連合教職大学院であるからには福井のストレートマスターと連携することに意味があると考え、1年目はコロナ渦で制限がある中、ZoomやLINEをつかって福井のストレートマスターと連絡をとりカンファレンスの形を確立すべく、試行錯誤を行った。初めは木曜カンファレンスを基本とし、隔週で金曜カンファレンスに参加する形をとっていた。ただ、参加が隔週であることによって金曜カンファレンスでの学びに遅れが生じたり途切れてしまったりすること、木曜カンファレンスでは運営の関係で、

金曜カンファレンスと異なる学びの進め方をしていたため負担が増すなど、二足のわらじを履いた状態がしばらく続いた。岐阜拠点の4人もそれぞれの思いがあり、福井拠点の状況も踏まえて考えないといけないため問題は複雑であったが、根気よく意見を出し合い、また、福井の先輩、同期に相談するなど約1年の試行錯誤を経て、①福井拠点についていくのではなく、岐阜拠点ならではの学びを福井拠点に共有することで互いにプラスになるようにする。②Zoomで数をこなすのではなく、1回の対面で質の高

い学びをする。③岐阜拠点の弱点である「教科の力」を克服することを視野にいった学びを進める。という方針をもとに、岐阜拠点ならではの週間カンファレンスの形をつくりあげた。長い時間がかかったが、このプロセスを通してメンバーの人柄を知り、信頼関係を築くことができたと思う。また、福井との繋がりも自然と強くなっていったと感じる。今年、新たにメンバーが1人増えたことで学びにも厚みができた。私たちM2は今年修了なので、これまでの積み重ねを後輩に引き継いで行くことが次の課題である。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

あるカンファレンスで連想した教師の姿

ミドルリーダー養成コース2年/南越前町立河野小学校 佐々木 清文

5月のカンファレンスで、次の言葉が実践報告の中に出てきた。「子供たちは体の不自由な人を見ているのではない、その人の周囲の人が、その人とどう接するかを見て、自分とその人との係わり方を決めているのです。」目の不自由な方を招待した時に、先生がその方から聞いた言葉である。この言葉は、強く印象に残った。3月に、ろう者講師と手話通訳者の二人から、手話を教えていただく授業があった。その授業からそれほど時間が経っていないだけでなく、ろう者講師に自分はどのように接していただろうかと思ったからである。

子供たちは、教師の姿、一挙一動をよく見ている。毎日、学校で会っているから当たり前かもしれない。子供は思っている口に出さないことの方が多いので。教師は気付かないで過ごすことが多いのだろう。親しくなりすぐに話しかけてくれる、1年生の子供

がいる。新しいシューズを履いた日に、その子と廊下ですれ違ったら、アメリカの靴みたいと言ってくれた。よく気が付いてほめてくれたなと思ったのは、ついこの間のことである。目の不自由な方の言葉には、体が不自由な人と素敵な係わり方ができる未来社会をつくるために、子供と一緒に真剣に考える教師の姿を、子供たちに見せてほしいという願いが込められているような気がした。

総合的な学習の時間に、福祉についてグループに分かれて学習することになった。あるグループが手話について調べたいというので手話を教えてくださいと探すと、ろう者の方が講師となり手話通訳者の方と一緒に教えていただける講習の存在を知った。県聴覚障がい者センターから、手話の普及と聴覚障害への理解を深める目的で講師を派遣していただけなのだ。この講習によって、手話とその意味を知るこ

とができるだけではない。この講習には、体験談を話す講師の姿から音が聞こえない日常生活がどのようなかを感じ、難聴の子供がいる学年なので、その子のことを少しでも理解してほしいという願いもあった。福井県手話言語条例が施行されたり、市町でも条例ができたりしているので、現在の子供たちが大きくなった未来では、手話がもっと身近になっている社会を実現しているかもしれない。

一人が一台の情報通信端末を持ち、学習する時代がやってきた。端末機器を学習に有効活用するために、まず教師が操作スキルの向上をめざしてがんばっている。展開図から立体へ、立体から展開図へ、あらゆる方向から見るができるアニメーションになっていて、視覚的によく分かるデジタルコンテンツがある。一方で、透明なアクリル板で1辺が30cm近くある立体を作って、子供たちに説明している先生の姿がある。このお手製の立体には辺や頂点にシ

ールが貼ってあり分かりやすい。上手に立体を作ったなど、感心したことを覚えている。また、定規とチョークでさっそうと図形を描く先生の姿もある。前者はスマートに図形や立体を見ることができ、後者は教師の素敵な姿を子供たちは見ることができる。

鏡を見なければ、自分の姿は見えない。教職大学院で学んでいる、記録を残して省察したり、カンファレンスしたりすることで、自分の姿を見ることができるのかもしれない。昨年度は僅かであるが、教職大学院で学んでいることを伝達した。また、気がかりな子供の対応で、教員全員が知っている具体的な事例でカンファレンスをして、子供の行動や教員の意識も改善された。今年度は昨年の自分の装いを新たにしてい、担当する校務分掌からできる実践を、少しずつ積み重ねていきたいと考えている。

生徒とともに楽しみ、ともに学ぶ

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス女子中学高等学校

竹中 智子

私は教職大学院での学びも2年目になりましたが、まだ一度も福井には訪れることが出来ていません。昨年度の1年目は、学校での仕事と子育てとの2本立ての中で、さらに教職大学院で学ぶことに不安もありましたが、オンラインという選択肢があったことで何とかやり遂げることが出来ました。2年目になり、今年度は、より多くの方とより多くのことを語り合いたいと思います。そのためには、福井へ足を運ぼうと計画中ですが、その矢先に新型コロナの感染者数が増えてきて悩むところです。対面での交流はオンラインでは出来ない雑談などの醍醐味を十分に味わいたいと思い、この夏は福井に足を運びたいと考えています。

先日、高1数学の三角比の単元で、実践授業を行いました。現在、隣接するカリタス幼稚園の新園舎建設が進められていて、毎日、工事を横目に娘をカリタス

幼稚園に送迎しています。工事の様子を見ていると、測量と数学の授業を繋げられないかと考えるようになりました。何でも相談してみるもので、建設会社の方も快く引き受けてくださいました。当日は女性の社員の方も来てくださって、授業の最後には理系コースの生徒に向けて応援メッセージまで頂きました。この授業を通して、生徒たちはいつもの教室から飛び出しての授業が楽しかったのと、数学が身近なところで役立っていることを実感できたとのことでした。私自身も、教員以外と授業案について打ち合わせすることがとても新鮮で、機材の仕組みや、機材も進化している話などたくさんの学びがありました。また、この授業を見学していただいた先生方からもたくさんの意見を頂き、生徒以上に学びの多い体験となりました。

ミドルリーダー養成ということで、自分自身が学び続けて成長していくことはもちろん、同僚を巻き込んでこのような授業実践などを企画したり、後輩の先生へ良いアドバイスができるような経験を自分自身が積んでいきたいと改めて感じました。私学で働いていると転勤もなく、メンバーもなかなか変わらずマンネリ化しがちですが、教職大学院で見聞き

する他校の実践から感じたことを学校に持ち帰ることで、マンネリ化しがちな学校の風通しを良くすることに貢献したいと思います。他校の実践をたくさん聞いて、質問などもどんどん出来るこの環境を大切に残り1年を過ごしていきたいと考えています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

遊びの中の学びを見つめる ～職員の協同的な学びの場づくり～

学校改革マネジメントコース2年/栗東市子ども青少年局幼児保育課 **内田 祥子**

今年の梅雨の時期はかなり短く、保育園や幼稚園の園庭では、6月下旬にしてすでに夏本番のような水遊びを楽しんでいます。自然を通して、また素材や道具にかかわって、そして一緒に遊ぶ友だちの姿から子どもたちの遊びの学びは広がっていくのです。先日も5歳児が砂場で山や川づくり、色水づくり、しゃぼん玉づくりなど砂や水に親しみながら遊んでいました。砂場の遊びの空間にいた5、6人の子どもは、全身を使ってどんどん砂を掘っていきます。それぞれが掘っていたところがつながっていくと水を運んでくる子が出てきました。「ここに水流すよ」「いいよ」「川できた」「あーもっと水いるな」。砂に水が浸透して、川のように水が溜まっていかず、どんどん水を運んでくる子どもたち。「もっともっと運んできてー」。自然に砂を掘る役と水を運んでくる役に分かれて、川づくりに挑んでいきます。この遊びの一場面だけを見ても『協同性』『思考力の芽生え』『言葉による伝え合い』など『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』のいくつかの姿が重なっています。このように子どもの遊びの中の学びは、ひとつの活動の中で、様々な要素が重なりながら広がり、深まっていくと考えます。

昨年度より、教職大学院で学ぶ機会をいただき、今までの自分の保育を振り返り、そして未来に向かって育つ子どもたちの主体的な学びをどのように支え

ていくのかということについて様々な視点を踏まえて学ばせていただいています。とりわけ毎回様々な場で取り組んでおられる先生方との語り合いの中で、自分自身を語っていくことは、現時点で課題と感じている事柄がより明確になり、その解決に向けて何にチャレンジしていけば良いのか自分の思いを整理し、また進み出せるそんな大事な時間です。

私は、昨年度より、長年勤務した保育現場から離れ、行政の立場での仕事をしています。昨年は、子どもたちの主体的な学び、主体的な姿を育む保育について推進していくために、今の立ち位置の中でどのような実践ができるのか、考え込んでしまうことばかりでしたが、今年度は具体的に、市内園が互いの園内研究を学び合う（公開保育を見合う）こと、子どもの主体的な遊びの中の学びの姿を語り合うことを進めてきています。園内研究の保育参観を他園からの参加も可能にし、子どもの学びの姿に焦点を当てて保育を見合うことは、参観者にとっての学びになることはもちろんのこと、保育者にとっても参観者が『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』をフィルターとして捉えた内容をフィードバックすることで、保育を省察することにつながることができます。このように保育を公開していくことは、職員の協同的な学びにつながるのではないかと考えています。そして就学前教育においては、子どもの姿の見とり方、

特に学びの姿の言語化、可視化をすることが益々重要になっていくと思います。

このような取り組みの一方で、長時間保育のニーズが高まる中、職員が学び合う時間をいかに見出していくのが大きな課題でもあります。カンファレンスの中で、『いそがしいからこそ、語り合いが重要ではないか』という言葉が、ずっと気持ちの中に入っていました。子どもたちのために、主体的な学びの

環境を整えることは、先生たちが安心して学べる環境、また語り合える環境作りに大きくかかわっていくことであると実感しています。今年度、少しずつ歩み始めた実践の中で、一つ一つの機会を大切に捉え、子どもたちと共に職員間の学びを深めつつ、その学びを支える仕組み作りについて取り組んでいきたいと思っています。

生徒とともに楽しみ、ともに学ぶ

学校改革マネジメントコース2年/埼玉県立越谷南高等学校

加藤 悟

新学期が始まって約2ヶ月が過ぎ、年度末から年度当初にかけての仕事がひと段落し、慌ただしい日々から一旦解放されつつある今日この頃。県教育委員会から届いた新型コロナウイルス感染防止対策ガイドラインの内容も厳しかったものから少しずつ緩和されてきています。2年間学年別で開催をしていた体育祭は、今年度3学年合同で行われました。感染防止対策のため、ソーシャルディスタンスを意識した競技内容だったり時間が短縮されたりはしましたが、約1,000名の生徒が一堂にグラウンドに集まった光景は、日常に戻りつつあるのかなと感じるものがありました。

福井での学びもあと1年をきってしまったことに焦りと悲しさを感じています。この1年間を振り返ってみると、カンファレンスや集中サイクル等をおして、多くの先生から刺激をいただくことができました。このいただいた刺激をもとに教頭として何ができるだろうかとやっと思える余裕が生まれてきています。

高校では、今年度入学した生徒から新しい学習指導要領のもとでの学びが始まっています。「何を知っているか」から「何ができるようになるか」を生徒に身につけさせるには、これまでと同じ授業のやり方だけでは太刀打ちできないことがわかってはいても、本校では、教科書の内容を修了することを主眼にお

いた一斉授業が中心となってしまう授業が多い現状があります。

そのような中でも、本校では、朝の10分間を使った『PISA タイム』という新しい教科の授業に取り組み始めました。この授業は、1週間を1つのまとまりとし、新聞記事等テキストを読み、要約し、自分の意見をまとめ、他者と意見を交換し、最後に改めて自分の意見をまとめる学習をChromebookでおこなっています。教材となる新聞記事は、全教員が、三人一組のチームとなって、選定にあたっています。授業の様子を覗いてみると、どの生徒も真剣に記事を読んだり、意見交換の場面ではそれぞれの意見を聞きながら自分の意見と比較をしたりしています。また、生徒へのフィードバックとして、よかった意見や記事を選んだ経緯等をまとめたPISA新聞の発行をおこない、生徒の意欲を継続させる工夫をしています。これから先生たちとともに、生徒にとってよい学びとなるように改善を続けていきたいと考えています。

教頭として、先生たちの学びをすすめるための取り組みにも今年は挑戦をしていきたいと考えています。本校には、研究部という存在がなく、研究紀要もありません。研修会というと公務員としての倫理確立のための研修等が主なもので、授業を改善するための研修がありませんでした。

1年ちょっと学校の管理職として働いてきた中で、先生たちに組織を意識して働いてもらうためには、どのように改善をしていけばよいかを考えてきました。福井大学の教職大学院に入学する前は、何に手をつけていけば改善ができるのかわからなかったのですが、この1年間の学びをとおして、「授業」をキーワードに組織の改善もできるのではないかと思い始めるようになりました。そこで、先生たちに「他の先生の授業ではなく、授業を受けている生徒をみませんか？」を誘い文句に先生たちとの授業研究会を始

めようと現在画策をしています。授業参観をするときのポイントをまとめたり、参観シートを作成したり、教頭業務の合間を縫って少しずつではありますが、実施に向けて準備をすすめているところです。

今後の学びを2月のラウンドテーブルの教職大学院改革特別フォーラムで教職員支援機構理事長の荒瀬先生がおっしゃっていた「一人一人の子供を主語にした」高等学校教育となるよう深めていきたいです。



月間合同カンファレンス報告

地域と連携をする価値とは

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校前期課程

五十嵐 彩香

5月の月間カンファレンスでは、グループでの語り合いにおいて、「地域連携をする意味」について話題にあがった。私は今まで地域連携をする意味を漠然と捉えており、なんとなく「学校だけでなく地域が一体となって子どもを育てていくことは素敵だな」と考えていたが、今回の月間カンファレンスで先生方との語り合いが、地域連携をする意味について改めて考え直すきっかけに繋がった。

まず、地域連携といっても地域の何と連携していけば良いのだろうか。地域には多様な人材が存在するだけでなく、様々な施設や資源がある。豊富な知識や経験を持った人との交流や、地域施設を活用した学習など、地域の良さを活かした教育活動を行うことで、子どもの知識が広がったり、地域への理解や関心が深まっていったりすることが考えられる。私自身、子どものころはあまり生まれ育った地に興味や

関心は無かったものの、年を重ねて地域について知れば知るほど、故郷への愛着心が芽生えるという経験をしてきた。子どもの頃から、自分の住む町の良さを実感できるように地域の人材や施設・資源などと交流していくことは、地域愛を育むことに繋がるという点で意味があるのではないだろうか。

また、福井県教育振興基本計画(令和2～6年度)においては、「児童生徒が地域の人々と共に地域の課題を改善し、発信する企画提案型の体験学習を推進」するということが記述されている。算数や数学のように、決められた1つの答えを論理的に導きだしていくことも大切であるが、答えの無い問いに向き合っていくことから得られることが多くある。子どもたちは、普段は学校という枠の中で生活をしているが、立派な地域の一員である。子どもたちが自分の立場を自覚し、今の自分たちの住む町の課題は何なの

か、自分たちが住む町がもっと良くならないだろうかというように、決まった答えの無い問いに地域と一体となって向き合っていくことで、これからの時代を生き抜くために求められる「他者と協働する力」や「粘り強く考え抜く力」、「創造する力」などが育成されていくのだと考える。以上のことから、地域と連携して課題に向き合っていくことは、子どもたちの「生きる力」の育成という点でも価値があると考えた。

今回、地域と連携する意味について考えてきたが、「地域愛を育む」とことと「生きる力の育成」以外にも多くの意味や価値があり、どのように連携していくかはまだまだ未知数である。これからの時代を生き抜く力の育成のために、将来は積極的に地域連携の学びを推進し、社会に開かれた教育課程の実現に努めたい。

「ゆっくりとした成長」という言葉に出会って

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井県教育総合研究所 木原 万由子

突然だが、私は苦手なことが多い。例えば、人前で話すこと。アドリブで話せる人や緊張せずに話せる人ってすごいなとつい感心してしまう。会議中に出てきた意見をまとめること。メモをとることや話についていくことで精一杯だ。ざわざわした場所にいればすぐに疲れてしまうし、集中したら周りが見えなくなってしまう。更に、コロナが流行ってからは、マスクを着けた相手とのコミュニケーションが苦手なことに加わった。どうしても声が聞こえづらく表情もわかりにくいからだ。

教職大学院に入学して以来、苦手なことに直面する機会は今まで生きてきた中でうんと多くなった。どうして自分は他の院生みたいに上手く出来ないんだろう。悩んでばかりだった。2年間かけて必死に周りについて行く中で不格好ながらも出来ることが出てきた。しかし、私が半人前になるまでに皆はずっとずっと先を行っている。ウサギとカメで例えたら、間違いなくカメである。いつになれば一人前になれるのだろうか。

そんなネガティブな私が、勇気づけられた出来事があった。5月のカンファレンスの出来事である。話し合いの中で、障害を持つ子どもたちはそうでない子どもたちと比べてゆっくり成長していくといった話題が出てきた。その時、ある先生が「ゆっくりした

成長を見取することも幸せなんですよ」と話されている場面が印象に残った。理由は初めて出会った価値観だったからだ。そして、一気に楽になった。自分のペースで大丈夫なんだと。早く、完璧に、期待以上の結果を出すことが正解だと思いこんでいた私は相当心身に力を入れていたらしい。

思えばこの2年間、先生方は、私に関して一度も匙を投げたことはない(と思う)。いつも根気強く導いてくださった。出来たことがあれば一緒に喜んでくださった。褒めてくださった。おかげさまで、最近では困ったことがあれば自ら先生方に頼ることも出てきた。頼る度に先生方は親身になって話を聞いてくださったり、解決策を共に考えてくださったりした。これまで、私は先生方と関わる度に、私の理解が遅いあまり、迷惑ばかりかけて申し訳ない気持ちでいっぱいだった。しかし、先生方が「ゆっくりした成長も、また1つの成長のあり方」という考えをお持ちであるということを知って以来、より安心して先生方に助けを求めることができるようになった。助けられる経験が増えていくことによって、一歩ずつ前に進んでいった。結果、今では自分のゆっくりとした成長を少し肯定することが出来ている。変化をもたらしてくださった先生方にとっても感謝をしている。

教職大学院のカンファレンスでは、心理学を学び直すきっかけが生まれたり、障害を持つ方への偏見問題について考えさせられたり、また今回のように新たな価値観に触れて生きやすさに繋がることもあ

る。残り一年間のカンファレンスでどれだけ素敵な出会いがあるだろうか。これからのカンファレンスがより一層楽しみになった。

省察、そして反省 ～5月合同カンファレンスを振り返って～

ミドルリーダー養成コース2年／二松学舎大学附属柏中学校・高等学校 向阪 望

2022年度がスタートして、2回目の合同カンファレンスが行われた。東京サテライトは板橋区教育委員会の研修室にて対面形式で実施された。昨年度のこの時期は新型コロナウイルスの感染状況で対面形式では行われていなかった。未だ収束はしていないものの、感染対策を十分に講じた上で、対面で学び会えることはとても嬉しいことである。

5月のテーマは『学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく』である。冒頭は東京サテライトのメンバーである宮古島市立狩俣小学校教頭の下地美和子先生による実践報告があった。「狩俣幼稚園の再開」・「幼小連携」など地域の方々とつくる学校の実践報告だった。報告後、私のグループには下地先生が一緒だったので、学校と地域が連携した学校づくりについて語り合った。私立学校勤務の私にとって、「地域とのつながり」を考えるきっかけとなった。

午前は「それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直し展望をひらく」をテーマにクロスセッションを行った。2022年度が始まり2ヶ月が経過しようとしていたが、私自身日々の業務に忙殺され、思い描いている計画が進んでいない。この2年間コロナ禍で行事が中止・縮小されてきたが、徐々に再開され始めている。言い訳になるが、2年間の時間の流れに慣れてしまい、コロナ前のペースに戻すのに時間がかかっている自分がある。何も前に進んでいない自分にただ反省をするばかりである。

午後は「求められる学習と変わる試験問題」がテーマである。全国学力・学習状況調査や大学入学共通テスト等の問題を踏まえ、学習の転換について探った。また観点別評価「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に取り組む態度」について、その進め方を探った。私は数学科の教員であり、中学校と高等学校両方の授業を担当することが多い。高校生の授業を担当すれば、私立学校として、進学実績の向上を意識する。それ故に、「大学入学共通テストを意識した授業展開をせざるを得ない」ということになる。簡単に言えば、点数を取らせるために・・・ということだろう。試験問題を比較すると従前の「センター試験」とは明らかに変わってきている。まさに「学習観の転換」が必要である。私自身も3観点を意識した授業実践に取り組んでいるが、構築するのにまだまだ時間がかかる。

そしてコース別に分かれてセッションを行った。ミドルリーダー養成コースは実践記録を読み、「求められる探究的な学習のプロセスとデザイン」を探った。私は木下慶之先生の長期実践報告「同僚とのプロジェクト型学習のデザインと、子どもたちの成長の実感」を読ませていただいた。私は今年度より学年主任として学年運営をしているが、木下先生の実践記録の中に私のこれからの方向性が示されていた。「子どもたちの協働探究を支えるために、教師も協働探究をすること」・・・勇気をいただいた。実践が進んでいないことに、また反省をした。

東京サテライトでは、カンファレンス終了後に M2 の院生を対象とした「長期実践研究セミナー」の第 1 回が行われた。長期実践記録を書くにあたって、どのような視点や考えを持つといいのか、福島先生や修了生の先生のお話から学び合った。第 2 回が 7 月のカンファレンス後に行われる予定となっている。

簡単ではありますが、東京サテライトの 5 月月間カンファレンスの報告とさせていただきます。改めて、毎月のカンファレンスでの学びは大きく、勇気をいただくと共に、省察と反省の時間でもある。「理論と実践の融合」の積み重ねが、本当に大切であることを実感し、また今日も明日も生徒たち、同僚と共に歩んでいこうと思っている。

5 月カンファレンスで感じたこと

学校改革マネジメントコース 2 年/敦賀市立中央小学校 瞿曇 俊雄

今まで敦賀市内の中学校での経験しかなかったが、本年度から教頭として小学校に赴任することとなった。教頭は校長、教務、事務とともに仕事をする人が多い。誰がどの仕事をするのか学校によって微妙に違うことは教務の経験が長かったため知っていた。しかし、中学校と小学校では結構大きく変わるので、教頭の仕事や学校全体の仕事の割り振りについて新たに考え直すことができた。また、担任の仕事スタイルも小学校と中学校では大きく違う。大まかにいうと小学校は個人で子どもを見る、中学校はグループで子どもを見るという感じがしている。そんな小学校と中学校の違いに感動したり、戸惑ったりしながら大学院で勉強をしているところである。カンファレンス等による違う文化との出会いは、現在の仕事を新たな視点で見つめ直すよいきっかけになる。今まで当たり前に思っていたことを疑問に感じ、何のためにそれをやっているのだろうと考えることができるようになり、物事を深くとらえることが多くなった。

沖縄の小規模小学校で、教頭として幼稚園との連携を含めた学校の経営にまで携わっている話があった。最初は、学校の経営は、行政や校長のみに関わる話ではないかと思いながら聞いていた。いや、校長であってもそんなに深く関わらないのではないか。しかし、その教頭は自分が勤める学校をよいものへとするため地域と連携しながら小学校施設内に幼稚園

をつくるなど学校を変えていく。このときに、校長だから、教頭だから、行政だからなどと考えている自分がおかしいのだと感じた。この教頭は子どもを見ている。子どものために何ができるかを考え、そして実行に移していく。その姿勢を私も見習っていきたいと思うし、また、全職員がそんな考えを持てるような職員室にしたいと思った。

高校の先生から、評価方法が変わり観点別が導入されたこと、入試のスタイルが変わってきてディスカッション+レポートの形式が増えてきたことを聞いた。推薦書等も担任が生徒をしっかりと把握していないと書くことができない。私自身の古い考えの中では、高校は義務教育ではないので講義型の授業を行っていれば大丈夫と思っていた。しかし、そうではなく個に応じた教育を行わなければならない。また、大学入学共通テストにおける知識も習得させなければならない。なぜこのようになっているのか、現在の入試制度や、社会のあり方について考えさせられた。いい会社に入るために、難関大学を目指し、その難関大学に入るために、偏差値の高い高校、中学校、小学校を目指す。そこに入るためには、「知識」が必要になる。そのため、知識注入型教育が主流となってしまう。現在の社会はそこから抜け出そうともがいているがなかなか上手くいっていないように感じる。知識についての評価はペーパーテストで客観的に公平に判断ができるが、現在大切にされている主体的な

学びは評価が難しい。今まで関わってきた生徒の中で、主体的な学びの力があり社会に出たらいい仕事をするだろうと思う子はいたが、それを評価として表すことはできなかった。今、文科省は、それを評価として表せないかということに取り組んでいるのではないかと私はとらえている。

最後に、上述したような思いや考えは、このカンファレンスで出会えなければ全く考えもしなかった。人と出会い、議論することは自分の考えを深める（学ぶ）上で欠かせないことだと思う。

学びの心地良さを感じたカンファレンス

学校改革マネジメントコース 2年/あわら市芦原小学校 五之治 多美

5月合同カンファレンスは、4月に続き対面で参加した。今回の実践報告は、宮古島市立狩俣小学校の下地 美和子先生。オンラインの画面越しではあったが、下地先生の「いちやり・・・」という明るい沖縄弁が、画面越しの福井の会場に明るい空気を届けてくれた。「いちやり」は「会えば友達になる」というホットな沖縄弁であることを知り、はるか距離を越えてつながっている贅沢な学びの場にいる心地良さを感じた。

下地先生は、狩俣小学校の教頭先生。狩俣小学校は、過疎に伴い児童数が減少していた。そんな小学校に併設幼稚園を復活させた実践であった。狩俣小学校の「地域にほこり、自分に自信をモットーに」という方針にも共鳴し、私は下地先生の報告を興味津々、傾きながら聞きかせていただいた。地域と学校の互恵関係で活性化を図る。教員間でも話し合いを重ね、地域の人の理解と協力が得られ幼稚園が復活した。その実践で特に印象に残ったことを3つあげる。

- ① 同じ校舎で園児と小学生が生活する、頼り頼られる関係の中、子どもたちが明るくなった。
- ② 地域の人を学校に招く中、子どもたちが地域の「潜り名人」の聴覚障害の方と出会った。そこで子どもたちは聞こえないという「障害」より、周りの大人がその人とどうコミュニケーションをとっているかに注目していた。
- ③ 核家族が増える中、保護者が孤立する傾向があった。そんな中、集団登校等で地域住民と保護者が声を掛け合うようになった。保護者自身、地域の人たちに見守られていることや頼ることができ

ることを感じ、保護者が孤立しない状況になった。

「役割は人を生き生きさせる」「バリアフリーで風通しのよい学校」「誰も孤立させない」「大人がモデル」。下地先生の実践から、自分にとっても大事だと思えるキーワードが心に深く響いた。

グループセッションでは、それぞれの学校の様子や先生の取組を聞くことができた。カンファレンスの醍醐味で新鮮な風が自分にも流れるのが心地いい。インターン先が中学校であるA先生。学校の規模が小さく、空き時間も多ことから、先生方がお互いの授業を見合い語り合う時間が多く、先生同士が学び合う雰囲気になっていると。A先生も、色々な先生の授業をみて、自分の個性にあった授業スタイルを見つきたいと。また、附属学校でインターンをされているB先生は、授業中の子どもの見取りをどのように行ったかを伝えてくれた。子どもが誰のどの意見に反応し、顔を上げたかなど動画撮影をしながら、丁寧に様子を見取ってきたという。若い先生方が、現場に出る前にこんな風に貴重な経験を積んでいることが頼もしく感じた。また、クロスセッションでは、岐阜県の不登校特例中学校（公立）に勤務されているC先生と同じグループになった。生徒の居場所作りに向け、職員全員が共通のベクトルで取り組んでいるという話が非常に興味深かった。

最後に、今回のグループセッションで、私が勇気づけられる言葉に出会えたことを紹介したい。大学院スタッフの天方先生が教えてくれた言葉である。

「語ることは学んでいること、聞くことは教えるということ」それは「人は漠然としていることを伝える中で学んでいる。そして、しっかりと聞いて応答することは、教えていることと同じこと」という。 年度末、私は、ラウンドテーブルで実践報告の経験をした。オンラインだったので PP の資料を準備して臨んだ。まとめる時も話す時も「自分の実践とは？物語るとは？何をどう伝えたらいいのだろうか。自分は相手が聞きたいことを伝えていない。何のためにここにいるのだろう」と珍しく沈んだ気持ちが続いていた。さらに、大学院での学びの時間も折り返しを過ぎ「実践報告」作成に焦りも感じていた。そんな時、この言葉に出会い、「語ることは他の人のためでなく、自分

が学ぶためだ」と思い直すことができた。私は、また自分自身が前向きになることができたことに安堵した。

これからも、漠然としたまま長期実践報告を書いたり語ったりしていくことになるだろう。そして、書いて読み直し、カンファレンスなどで聞いてもらうことで、自分の思いや歩みが整理され、気づきや学ぶ経験が重なっていくはずである。思えば、小さい頃から私は、「気づき」の瞬間の「すっきり感」が好きだった。これからは、それを楽しみにしながら手探りを恐れず、書いて、語っていこうと思う。



修了生だより

今号では、大野市開成中学校の加藤先生から、原稿を提供いただきました。

雷鳳

ーもっとも輝く瞬間へー

大野市開成中学校 教諭 加藤 儀直

はじめに

昨年度より、母校である開成中学校に赴任した。母校で教えるというのは、本当に不思議な感覚である。かつて使っていた机、教室、全てがその当時のままであり、あの時の記憶が蘇ってくる。また、同僚の先生方の多くは学生時代に教えていただいた先生方ばかりであり、そのような中で仕事をするというのもまた不思議である。

久しぶりの中学校勤務となり、まず振り返ったことは大学院のことである。「私」が何を大切に、実践に取り組んでいたのか。キーワードは、報告書のサブタイトルにあるように「人と人とが向き合い、つながる」ことであった。学校に来て友達と話すこと、学校に来て先生と話すこと、コロナ禍で人との関わりが希薄になる中たくさんの「人」とつながりあうことは必要不可欠であるように感じる。

開成中に赴任して2年目の令和4年度は、昨年度担任していたクラスを継続して担任することとなった。1年と+αの学級作りを振り返る中で、自分自身の実践を整理していきたい。

1. 学級の向かうところ

新年度の学級開き。私は、いつも同じようなことを子どもたちに伝える。

- ①教室環境を整える
- ②時間を守る
- ③自分発信のあいさつをする

これら3つのことは、できて当たり前にしたいくともある。特に、①と②は安心・安全な場を作るために徹底して指導を行った。すると、ある生徒が、このようなことを言う。

「先生は、一つ一つが細かくて、厳しすぎる」

私の中で、厳しくしていることはない。おそらく、学校文化として生徒自身が判断し行動する場面が多かったため、適切な規準を知らなかったのであろう。このタイミングで、私から次のような話を学級全体へ行った。

「ある場所に、2つの建物がありました。1つの建物は窓が割れていたり、壁に落書きがされています（A）。もう一つは、窓はわれていませんし、壁に落書きもされていません（B）。この後、AとBの建物はどうなる？」

私の問いかけに対して、全員がAの建物だけさらに窓が割れたり、壁に落書きがされると答えた。

「ロッカーが整理されていない、物が散乱している。この状態をそのままにしておくとうどうだろう？」

この問いかけに対しては、数人が「周りに迷惑をかけていないから、別にいい」と言う。この素朴な疑問は、そのまま受け入れてしまいそうではあるが、ここに教師の姿勢が問われているといっても過言ではない。私は、続けてこのようなことを話した。「先生が目指す“教室”というのは、安心・安全な場であることです。家で何か嫌なことがあっても、学校に来ると友達がいる。そして、自分の場所がある。そこで、思いっきり学ぶことができる。そんな『場』を創っていきたいと思っています」と。「安心・安全」、この2つのキーワードは私が学級作りを進めていく上で一番大切にしていることでもあるが、ここが達成されなければ充実した学びはおろか、学校へ行こうと思えるようにはならない。

2. 学級目標作り（R3 年度）

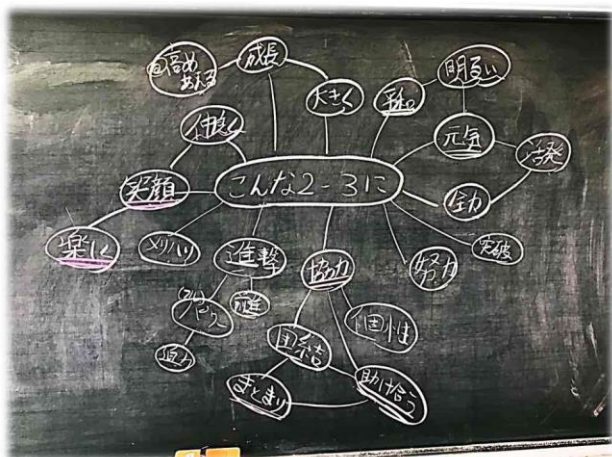
ゴールデンウィーク明けから、学級目標を考え始めた。考えていく上で、私からは次のポイントを示した。

- ① 1年間の方向を示す目標であること
 - ② 活動毎に、学級目標に立ち返って振り返りする

2つのポイントを示し、あとの議論は学級委員を中心に進めていった。最初の議論で各班から出された案には、「bright」「宇宙」「一等星」「笑花」など、キラキラと輝くキーワードが多くみられた。しかし、一つの班が示した「進撃加藤団」の案に、多くの生徒が賛同しかけた。子どもらは、「昨年度まで他のクラスでは先生の名前が入った学級目標もある」と言い始め、クラスの総意として決まりかけたように見えた。しかし、その時の雰囲気は学級目標というよりもどこかウケ狙いにも見える。そこで、私から再度次のことを話した。

「クラス替えをして、新しいクラス、新しい仲間と、いったいどんなクラスを作りたいの？1年後、どのような3年生になりたいの？この目標でもいいけれど、今の議論を聞いていると、思いが伝わらない。全員が、もう一度考えてきなさい。」

かなりきついことを言ったかもしれないが、翌週月曜日に提出された「マイスクールライフ」の3行日記を見ていると、それぞれの思いがよく伝わってきた。その日の午後、改めて学級目標決めの話し合いを再開する前に、私から「こんな2-3に、大切にしたいキーワードは何？」と問いかけ、全員に意見を求めた。すると、「協力」「助け合う」「笑顔」「仲良く」「平和」「明るい」「成長」など、本当にあたたかな言葉で黒板が埋め尽くされた。ここで想いを共有したことを踏まえて、再度考えさせると次のようなことが話し合われた。



「進撃の〇〇ってしたい」

「進撃の戦いって、仲間で困難な巨人に立ち向かっていくストーリーだから、このフレーズを使いたい」「新しい学年、新しいメンバー。あと2年間、色んな困難なこともあるから、そのことも入れていきたい」

このような議論を経て決定した学級目標は、「進撃の戦い～ぶっちぎれ技術の2ッ3～」
時間をかけて議論を重ねたからこそ、自分達を象徴する目標が出来上がった。

● 1年間の取り組みを振り返って

私の見通しの甘さがあったため、子どもらには無理なお願いをすることが多くあった。その中でも特に印象に残っているのが、学校祭の飾り付けである。2年生は、体育館や生徒玄関の飾り付けをすることに急遽決まり、文化祭まであと3日という時間がないなか制作をすることになった。

3日といいながらも、前日は飾り付けをしないといけないので、実質2日で仕上げるのは無理である。しかし、子どもらは成し遂げた。完成までのプロセスを振り返ると、全員が一つの目標（ゴール）に向かって歩みを進め、全員の力を結集させて多くの装飾物を制作していた。リーダー的なTさんが的確な指示を出し、クラスの中に小さなチームが作られていく。そして、最後は形になっていったのである。いわゆる「分散型コミュニティ」の理念に近い組織を子どもたち自身が作り上げていた。

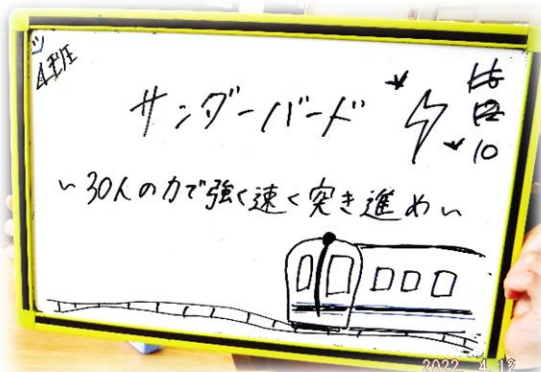
たった半年でここまで成長をした理由はなぜか。当時は全くわからなかったが、その一つの答えは今年度の「学級目標決め」の中に見られた。

3. R4 年度の学級目標作り

令和4年度の始業式の日、担任発表も無事に終わり私から新年度最初の宿題として、「学級目標を考えてくる」ことを課した。今年度は、昨年度の決め方と少し異なり、自分達を象徴する目標になるといいこと、昨年度の振り返りを行い、その上で今年度どのような学級を目指したいかを真剣に考えることを求めた。

今年度の学級目標案で示されたことは、夢の実現に向かって前に進み続けていくフレーズが多くあった。また、グループでの議論の中で、昨年度の学級目標をふまえて自分たち自身がさらにシンカする1年

にしていきたいという思いも語られていた。決まった学級目標は、「サンダーバード」。しかし、議論はこれで終わらなかった。学級委員のHさんが、「今、サンダーバードに決まったけど、漢字がいいって言う人もいて、どうするといいですか?」と全体に向けて問いかける。せっかく決定した目標に、手を加えようとしたのだ。横槍を入れる形ではあったが、私はいったん「今、決定したことは、片仮名表記の『サンダーバード』。話し合いを聴いていると、3組を象徴していて本当にいい目標になったなーって思う。だけど、多数決で決定したことをあえて手を加えるって、違うんじゃない?」。このようなことを語りかけると、Mさんが「4班のみんなは、どう思ってる?」と問いかけた。4班のメンバーは、「漢字でもいいと思うし、読み方がサンダーバードであればいい」という。ここから、さらに自分たちの学級目標をより自分たちらしい目標にするための作業が始まった。



サンダーバードは、実在する特急列車の名前であり、以前は雷鳥という特急列車も県内を走行していた。子どもらの話し合いに耳を傾けると、どうも「鳥」をイメージしているようだった。私自身「雷鳥」を知らなかったので調べてみると、予想とは真逆の小さくて可愛い写真がたくさん出てきた。しかし、写真の雷鳥はイメージとあわない。もう少し話を聴いていると、サンダーバードに込められた思いというのが「不死鳥」に近いものだとなってきた。このような経過を経て、漢字表記を「雷鳳」とすることに決まった。

これだけではなく、学級目標につけるサブテーマの議論も同時に展開された。「30人の力で、強く早く突き進め」でも問題はない。しかし、原案を出したTさんは、サブテーマを変えたいようだった。ここでの議論も本当に中身の濃い議論であり、「もっとも輝く瞬間へ」に決まった。

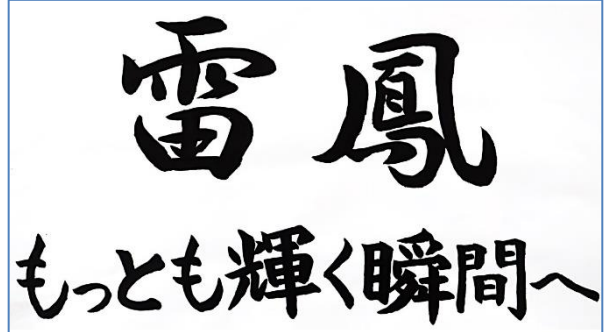


図1 学級目標浄書 (Nさん作)

(1) もっとも輝く瞬間とは・・・

この学級目標に決定してすぐ、私から次のような話を学級全体にした。

サブテーマ「もっとも輝く瞬間へ」。これも、3組を象徴していますね。昨年度1年間、授業や行事の写真をたくさん撮り続けてきました。わからない問題に会い、「うーん」と考え込む姿、友達と悩む姿、わかったときに嬉しくなる表情、友達の「わからない」思いに寄り添い丁寧に教える光景、そんな光景をファインダー越しからもたくさん撮ることができました。

日々の学習で「輝く」

難しいことですね。自分の考えを発表する、ノートを美しくとる、テストで高得点をとり続ける。そのためには、日々の努力が欠かせませんが、小さな積み重ねが大きな成果となります。まずは「確認テスト」に向けて、どのように取り組みを進めるかです。自主学習ノートを毎日1ページずつやることからでもいいのです。

委員会活動で「輝く」

今年度、3組から「委員長・副委員長」になった人は少ないですが、「委員長」や「副委員長」になることが学校を動かすことにつながりません。委員長や副委員長は的確な指示を出して、メンバーを動かしていくことが大切になりますが、それ以外のメンバーは「自分から、気づき・考え・行動する」ことが必要です。つまり、委員長や副委員長以外のメンバーがどのように行動するかにかかっているのです。

日々の生活で「輝く」

これは、具体的にどのようなことを言うのでしょうか。以前、「凡事徹底」という話をしましたが、そこにヒントがありそうです。

例えば、「整理整頓」。今は、授業がスタートしたばかりなので、ロッカーの煩雑さが目立つことはありません。しかし、全ての授業が本格的にはじまると、ロッカーの中に入れる物が多くなってしまいます。「入りません」ではなく、常に整理整頓をして美しい状態を保ち続ける。これを実践し続けることは相当努力が必要です。そして、挨拶。この挨拶のレベルが、この1年間でさらにあがって学校全体がシンカしていくといいですね。

これ以外にも大切なポイントは当然あるが、まずは3つのことを徹底してほしいという思いから、この話をした。「輝く瞬間」は、イベントだけに限ったことではない。むしろ、イベントで輝く人というのは普段からもその瞬間が多いように思う。イベントで目立つ人にはならなくてもいい。一人の人として、立派に育ってほしいという願いをこめて伝えた。

(2) 1年かかった実践 Community

新年度がスタートして1ヶ月が経過した。継続して同じクラスを担当しているので、私のやり方や考え方はある程度浸透している。私は、昨年度1年間、子どもらには次のことを言い続けてきた。

「最後の責任は先生がとるから、自分たちのやりたいことをちゃんとやりなさい」と。

この言葉を必ず伝えたからこそ、子どもらは一つ一つの行事の意味や価値を考え、創り上げたのだと思う。学級委員が常にリーダーになって指示をするのではなく、自分たちの考えを共有し、小さなプロジェクトチームを組織して1つの大きなことを成し遂げる姿は、私が理想とする一つの形であった。誰も、コミュニティ・オブ・プラクティスの理論について教えてはいないが、子どもたちの手でここまで成し遂げるのは感慨深い。

そして今年度。私の判断で学級組織の大幅な変更を行った。昨年度までは、「委員会」「教科係」「3.1役」と、かなり細かくわかりにくかった。そこで、今年度は「委員会活動」と「係活動」と呼び方を変え、委員会は主に学校全体に関わることで、係は主に学級内に関わることで位置づけをした。各活動では、常に学級目標に掲げたことを意識し、自分自身が“もっとも輝く瞬間”を追い求め活動に励んでいる。

(3) 実践コミュニティの背後にあるもの

一人一人が輝くために、担任である私がある場に存在するだけではいけない。大人が放っておいても、時間の経過とともにある程度成長していくであろうが、それではいけない。教師が「放任主義」に走ると、中学生にもなればそのような態度を子どもたち自身は感じ取ってしまう。

子どもたちが「輝く」ためには、いつもいる「場」が「安心・安全な場」でなければいけない。思いっきり自己開示ができる、護ってくれる大人がいる、このような場を創ることで、織物を編んでいくように「縦糸・横糸」がしっかりと編み込まれていくのであろう。

4. 最後に

R3年度の秋から、ずっと続けていることがある。それは、子どもらの取り組みを価値づけていくために「夢ノート」とタイトルをつけた通信である。この通信には行事の写真、私の小話だけではなく、行事を終えた後の感想や振り返りも記述される。

最初は物珍しそうに見ていた子どもらであったが、通信の中には私がこれまでの歩みで失敗した経験を赤裸々に綴ることも多いので、真剣に読む子が少しずつ多くなっている。毎日関わっていると、子どもら一人一人の成長はあまり感じないが、他の先生方やお家の方々からたくさんの言葉を聴くたびに本当に1年間で大きく成長したんだと改めて感じる。

先日、合唱コンクールを久しぶりに開催することができて、私のクラスは見事「最優秀賞」をとることができた。私は「放置」が本当に大嫌いな人間なので、中学校教師の中ではどちらかというと子どもらに関わりすぎていると思っている。それだけ関わって子どもらと共に曲を創り上げてきたからこそ、本番の演奏を聴いたときは久しぶりに感動をした。ストレートで、素直で、本当に大きく成長したと感じた瞬間であった。

そんな30人と過ごす時間は、もう1年もない。ただ、限られた時間の中には「体育祭」「文化祭」「修学旅行」「高校入試」たくさんの行事がある。楽しいことは全力で楽しむことを積み重ねて、たくさんの思い出を胸に学び舎を巣立ってほしいなと願っている。

2022年度の拠点校、協働実践校、連携校の一覧

2022年度 福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 拠点校・協働実践校・連携校

拠点校・協働実践校 21校

- | | |
|---|--|
| <p>【福井県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 福井市中藤小学校 福井市明新小学校 福井市安居中学校 福井市至民中学校 坂井市立丸岡南中学校 美浜町立美浜中学校 福井県立丸岡高等学校 福井県立羽水高等学校 福井県福井東特別支援学校 福井大学教育学部附属幼稚園 福井大学教育学部附属義務教育学校 福井大学教育学部附属特別支援学校 福井県幼児教育支援センター 福井県嶺南教育事務所 福井県教育総合研究所 福井県特別支援教育センター | <p>【東京都】</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京都板橋区立中台中学校 東京都板橋区立赤塚第二中学校 東京都板橋区立上板橋第二中学校 カリタス学園(幼稚園・小学校・中学高等学校) 板橋区教育委員会 <p>【奈良県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 奈良女子大学附属幼稚園・小学校・中等教育学校 <p>【岐阜県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 岐阜聖徳学園大学附属小学校・中学校・高校 <p>【沖縄県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 沖縄県宮古島市教育委員会 |
|---|--|

拠点校・協働実践校(機関)
教職大学院と連携して、学校拠点の協働
研究を長期にわたって継続している学校
や機関。学部卒業生の実習を受け入れる
学校(機関)も含まれる

連携校・協力校(機関)
現職教員院生が在籍する学校。教職大学院
と連携して現職教員院生の学修を支える。

主な連携校 55校

- | | | |
|---|---|---|
| <p>【福井県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 福井市一乗小学校 勝山市立三室小学校 あわら市荻原小学校 坂井市立磯部小学校 南越前町立河野小学校 越前市吉野小学校 敦賀市立宿見小学校 敦賀市立東浦中学校 敦賀市立中央小学校 小浜市立小浜小学校 美浜町立美浜東小学校 高浜町立高浜小学校 若狭町立瓜生小学校 福井市藤島中学校 福井市社中学校 福井市足羽第一中学校 鯖江市東陽中学校 福井県立高志中学校 福井県立大野高等学校 福井県立福井南特別支援学校 福井県立武生東高等学校 福井県立若狭高等学校 啓新高等学校 さくら認定こども園 認定こども園福井俊成幼稚園 幼保連携型認定こども園和田こども園 まごころ認定こども園 | <p>福井県教育庁</p> <p>福井市教育委員会</p> <p>【石川県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 金沢高等学校 <p>【長野県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 岡谷市立川岸小学校 <p>【岐阜県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 羽島市立中央中学校 岐阜市立徹明さくら小学校 岐阜市立草洞中学校 栗東市役所 <p>【滋賀県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 滋賀県教育委員会 <p>【東京都】</p> <ul style="list-style-type: none"> 江東区立深川第二中学校 練馬区立開進第二中学校 品川区立東海中学校 町田市立武蔵岡中学校 保善高等学校 二校学舎大附属中学校・高等学校 立教女学院中学校・高等学校 学校法人晃華学園 東京栄養食料専門学校 <p>【埼玉県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 埼玉県立越谷南高等学校 <p>【静岡県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 戸田市立戸田中学校 <p>【静岡県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 静岡市立清水桜が丘高等学校 | <p>【沖縄県】</p> <ul style="list-style-type: none"> 宮古島市立狩俣小学校 多良間町立多良間中学校 沖縄県宮古島市教育委員会 沖縄県宮古教育事務所 <p>他</p> |
|---|---|---|

※マップ内のオレンジ色塗りは、これまで福井大学と連携してきた都道府県になります。

教職大学院のパンフレットがリニューアルされました

福井大学大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科

連合教職大学院

学校のリーダーを育て、
「学校拠点方式」に基づき学校の問題を解決し、
高い教師力を目指す連合教職大学院



福井大学



東京サテライト



奈良女子大学



岐阜聖徳学園大学

福井大学は、令和4年3月9日に文部科学大臣より教員養成フлагシップ大学の指定を受けました。本学は指定大学の中で唯一の総合大学であり、教員養成を牽引する牽引役として期待されています。現在、独立行政法人教員養成支援機構（NITS）と協働して教員研修の高度化に取り組んでいます。

福井大学の取り組み詳細は本誌のHPを参照ください。（※日曜版予定）
なお、本教職大学院のHPよりリンク先を見つける予定です。

United Graduate School of Professional Development of Teachers
University of Fukui, Nara Women's University, and Gifu Shotoku Gakuen University

教職大学院の特色や概要を
わかりやすく説明しています

実践し 省察する コミュニティ

～2年間の学びの
流れと仕組み～

福井大学連合教職大学院は、
21世紀の学校教育を担う教員の
専門性を高めるために、
様々な取り組みを通して
学びを深めています。
1年間の活動を紹介します。



福井大学大学院 連合教職開発研究科
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学（連合教職大学院）

年間の実践と学習の流れを写真を
使ってわかりやすく解説しています

【教職大学院事務室より】

広報チームの先生方にご協力いただき、2022 年度版の新しいパンフレットを発行いたしました。

<改訂箇所>

- ・「拠点校、協働実践校、連携校の一覧」を更新（39P に掲載しています）
- ・拠点校、協働実践校、連携校の定義を明示
- ・教員養成フлагシップ大学の指定について紹介
- ・年間の実践の様子をお伝えする写真の更新 等

福井大学教育系1号館6階のコラボレーション・ホールにも、改訂後のパンフレットを取り揃えておりますので、お越しの際は是非お手にとってご覧ください。

訪問用・広報用等に必要な先生方がいらっしゃいましたら、連合教職大学院事務室へお気軽にお声かけください。

Schedule

7/22,23,24 Fri. **Sat. Sun.** 夏期集中講座サイクル1A 日程、 7/25,26,27 Mon. Tue. Wed. 同 B 日程

7/29,30,31 Fri. **Sat. Sun.** 夏期集中講座サイクル2A 日程、 8/1, 2, 3 Mon. Tue. Wed. 同 B 日程

8/4 Thu. 宮古島ラウンドテーブル

8/5, 6, 7 Fri. **Sat. Sun.** 夏期集中講座サイクル3A 日程、 8/17, 18,19 Wed. Thu. Fri. 同 B 日程

9/17,18,19 Fri. **Sat. Sun.** 夏期集中講座サイクル3C 日程(予備日)

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】161号も皆様の寄稿により、発行することができました。そして、今号でも嬉しいことに修了された院生さんからの投稿をいただきました。皆様の学びが繋がり、広がっているのを感じます。ありがとうございます。

また諸事情により、発行が遅れましたことを改めてお詫び申し上げます。(H・T)

教職大学院 Newsletter

No.161

2022.8.10 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp